

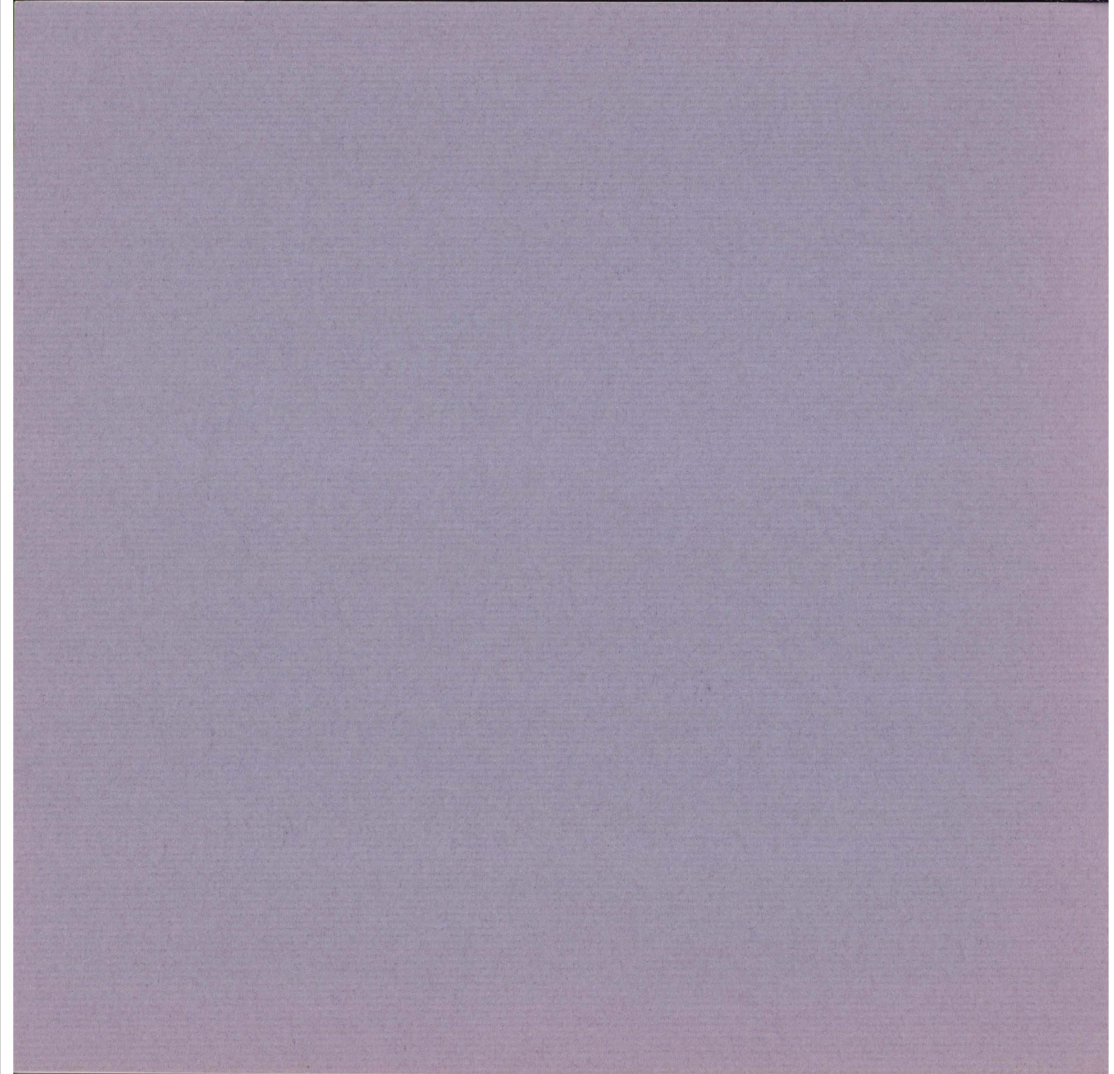
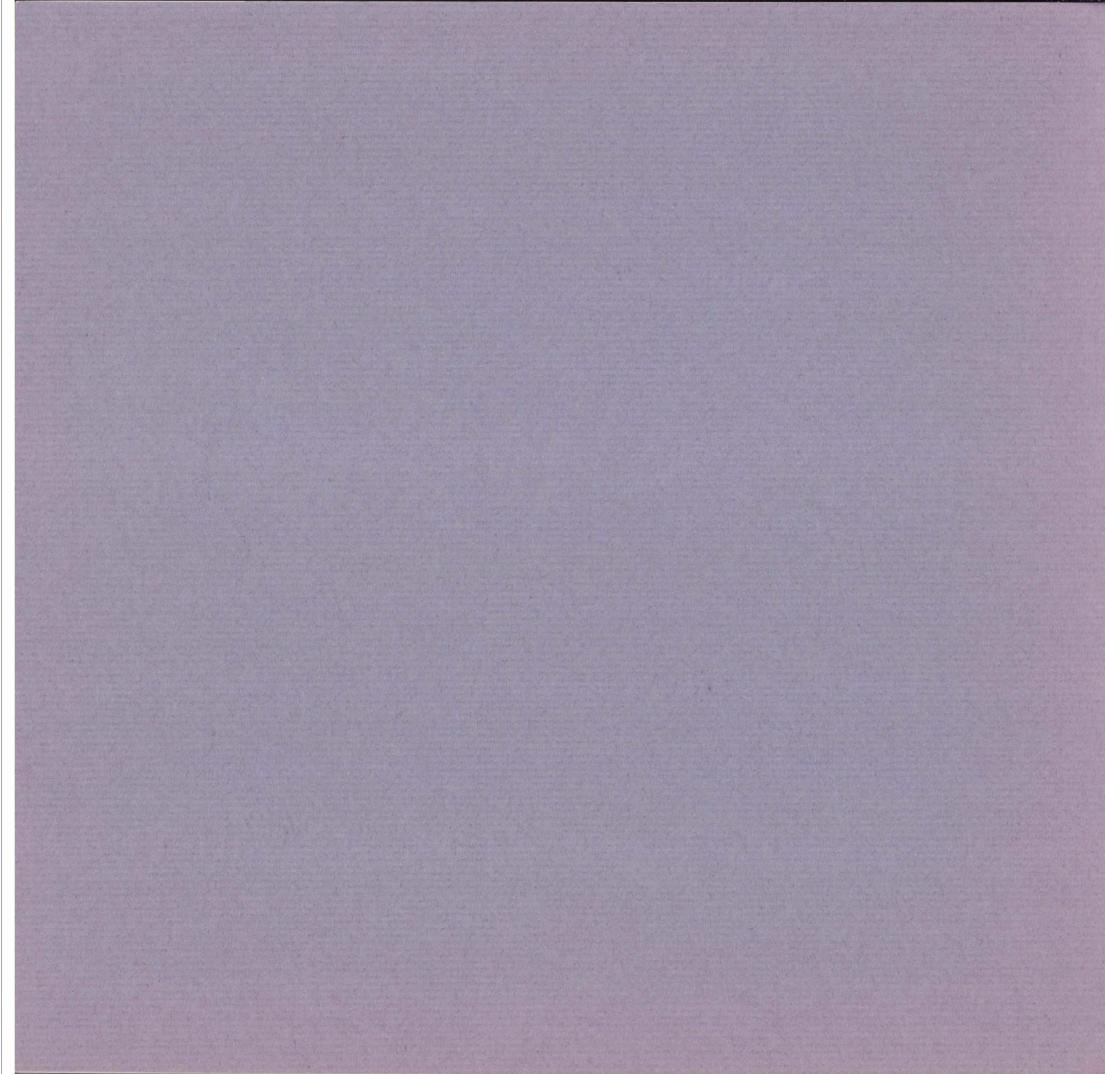
NBS

Japan Performing Arts Foundation
1985



Leonard Bernstein

The Israel Philharmonic Orchestra





The Israel Philharmonic Orchestra

Conducted by

Leonard Bernstein

1985 Japan





The Israel Philharmonic Orchestra Japan Tour 1985

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団 1985年日本公演スケジュール

Presented by Japan Performing Arts Foundation

9/3 (水) 7:00p.m.	大阪フェスティバルホール Osaka Festival Hall 主催：大阪国際フェスティバル協会・朝日新聞社	9/10 (水) 6:00p.m.	聖徳学園・川並記念講堂 Seitoku Gakuen Kawanami Memorial Hall, Matsudo 主催：聖徳学園短期大学
9/4 (木) 7:00p.m.	大阪フェスティバルホール Osaka Festival Hall 主催：大阪国際フェスティバル協会・朝日新聞社	9/11 (木) 7:00p.m.	NHKホール NHK Hall, Tokyo 主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社
9/5 (金) 7:00p.m.	名古屋市民会館大ホール Nagoya Shimin Kaikan 主催：中京テレビ	9/12 (金) 7:00p.m.	NHKホール NHK Hall, Tokyo 主催：民主音楽協会・日本舞台芸術振興会・朝日新聞社
9/7 (土) 7:00p.m.	ザ・シンフォニーホール The Symphony Hall, Osaka 主催：朝日放送・大阪国際フェスティバル協会	9/14 (土) 7:00p.m.	NHKホール NHK Hall, Tokyo 主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社
9/8 (日) 7:00p.m.	NHKホール NHK Hall, Tokyo 主催：日本舞台芸術振興会・民主音楽協会・朝日新聞社	後援：外務省・文化庁・イスラエル大使館・朝日イブニングニュース社(東京・大阪) 制作：ジャパン・アート・スタッフ	



Program

〈マーラー生誕125年記念〉
〈バーンスタイン・マーラーサイクル25周年記念〉

グスタフ・マーラー
Gustav Mahler

交響楽 第9番 ニ長調
SYMPHONY No.9 in D major



Program

レナード・バーンスタイン
Leonard Bernstein
「ハリル」

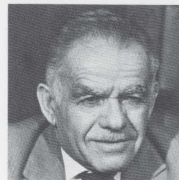
フルート、弦楽オーケストラ、打楽器のためのノクターン
"HALIL"

Nocturne for Solo Flute, Strings Orchestra and Percussion
フルート独奏：ランサム・ウィルソン
Flute: Ransom Wilson

レナード・バーンスタイン
Leonard Bernstein
「ウェストサイド物語」より「シンフォニック・ダンス」
SYMPHONIC DANCES
from "WEST SIDE STORY"

ヨハネス・ブラームス
Johannes Brahms
交響曲第1番 ニ短調 作品68
SYMPHONY No.1 in c minor Op. 68

RANSOM WILSON PLAYS THE SAKUYO FLUTE
ランサム・ウィルソン氏による「ハリル」の録音が収録されています



シャローム

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団がマエストロ・レナード・バーンスタインの指揮のもとに日本への公演旅行に発つことを聞き、喜んでおります。

同オーケストラは長年に亘り、イスラエルの大使として外国で優れた活動을続けて参りました。日本公演は3度目になりますが、演奏活動に加えて、このような古来の伝統と新しい文化の両面で卓越したものをもつお国を訪問できることは、重要な意味を持っています。

日本国中にひびき渡るイスラエルの声が、今回は、イスラエル・フィルハーモニックの調和のとれた音色から発せられることを喜んでいます。

副首相/外務大臣

イツハック・シャミール

Shalom,

I was happy to hear, that the Israel Philharmonic Orchestra, conducted by Maestro Leonard Bernstein is embarking on a concert-tour of Japan.

Our Philharmonic Orchestra has for many years served as an excellent ambassador of Israel abroad. There is added importance to it playing, now for the third time, in a country like Japan, which excels in both ancient and new traditions and culture.

It is good that the voice of Israel, that shall be heard throughout Japan, will this time originate in the harmonious sounds of your orchestra.

Respectfully,

YITZHAK SHAMIR
Vice Premier
and Minister of Foreign Affairs



イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
及び指揮者レナード・バーンスタイン氏へ

日本と米州への公演旅行の開始にあたり、皆様の成功を祈る心からの気持ちを伝えたいします。

世界の名高い舞台で優れた演奏を行うことにより、皆様は芸術家として、またイスラエル国民として重要な役割を果たし、世界各地の人々の間でイスラエルの名を高めることに貢献しているのです。

心をこめて

副首相/教育文化大臣

イツハック・ナヴオン

To The Israel Philharmonic Orchestra
and its conductor Leonard Bernstein,

Upon your embarking on a concert tour of Japan and the United States, please accept my sincere wishes for your success.

By your excellent appearances on the distinguished stages of the world you fulfil a most important artistic and national mission and contribute to enhancing Israel's reputation among the peoples of the world.

With best wishes,

ITZHAK NAVON
The Deputy Prime Minister
and Minister of Education and Culture



今回の日本公演にあたり、イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団とマエストロ・レナード・バーンスタインに心からのごあいさつをお届けできるとに喜びと光栄を感じております。

同オーケストラを再び日本に迎える機を得て、私は大変誇らしく存じます。前回の1983年3月の日本公演でIPOは大きな評価を得て賞讃され、日本の音楽愛好家の方々に好まれるオーケストラのひとつとしての地位を固めました。

IPOはイスラエルでは最も重要な文化的財産と考えられており、我々と国民の誇りとなっています。イスラエル国内をはじめ世界の多くの国々で何千回という公演活動を行い、そのたびに熱狂的な歓迎を受けて参りました。

主要オーケストラのひとつとして、IPOはイスラエルから日本の皆様への親善大使の役割を担って参りました。世界最高の指揮者のひとりであるマエストロ・レナード・バーンスタインの指揮のもとに行われる演奏会が、最高レベルのすばらしいものとなることに疑いの余地はありません。音楽に対する愛情と理解力では定評のある日本の聴衆の皆様が、これまでの日本公演と同様に、IPOの今回のコンサートを楽しんで下さることを願って止みません。

IPOの日本公演を実現して下さった日本舞台芸術振興会に、心からの感謝の気持ちを述べさせていただきますと共に、この公演を通じ、イスラエルと日本が、国家同士、国民同士の暖かな友情に満ちたつながりを、より一層強めていけるものと確信しております。

駐日イスラエル大使

アムノン・ベン・ヨハナン

It is my pleasure and privilege to extend warm greetings to the Israel Philharmonic Orchestra and to Maestro Leonard Bernstein upon their present concert tour in Japan.

I am very proud to have the opportunity to welcome the Israel Philharmonic Orchestra once again in Japan. The IPO has gained great respect and acclaim during its last visit here, in March 1983, and has established itself as one of the philharmonic orchestras much admired by the Japanese music lovers.

The IPO is regarded in Israel as a most important national cultural asset and is a source of pride to our country and people. It has performed thousands of concerts in Israel and in very many countries in the world, and was received enthusiastically everywhere.

As one of the leading orchestras, the IPO fulfils the role of an ambassador of goodwill from Israel to the people of Japan. Its performance under the baton of Maestro Leonard Bernstein, one of the world's most distinguished conductors, will no doubt be a musical event of greatest excellence. I hope that the Japanese audience, noted for its love and appreciation of music, will enjoy the concerts of the IPO, as they had in its previous visits.

I would like to extend warm thanks to the Japan Performing Arts Foundation for making the visit of the IPO in Japan possible. I am confident that the tour will further strengthen the warm and friendly relations between our two peoples and two countries.

A. Ben-Yohanan

AMNON BEN-YOHANAN
The Ambassador of Israel



財団法人日本舞台芸術振興会、同民主音楽協会等の主催によりイスラエル・フィルハーモニー管弦楽団の演奏会が、東京をはじめ大阪、名古屋などで開催される運びになりましたことをお喜び申し上げます。

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団は1936年の設立当初から「弦のイスラエル・フィル」といわれ、そのつややかなで繊細な弦の響きは高い評価を受け、現在では世界のトップ・クラスをゆくオーケストラであるとお聞きしております。

一昨年の来日に続く今回の公演会では、輝しい足跡を残している巨匠レナード・バーンスタイン氏の指揮により演奏されますが、氏のつくり出す音楽は聴衆に深い感動を与えてくれるものと期待しております。

この公演の開催に尽力された関係者各位に敬意を表しますとともに、公演の御成功と、日本とイスラエル両国の文化交流が一層促進されますことを祈念いたします。

文化庁長官 三浦朱門

SHUMON MIURA
Commissioner General for Cultural Affairs



このたび「レナード・バーンスタイン指揮イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」をお迎えするにあたり、一言ご挨拶を申し上げます。

「イスラエル・フィル」は、ヨーロッパのユダヤ系音楽家を結集して、1936年に創設されたオーケストラで、第1回の演奏会をトスカニーニが指揮し、栄光の第一歩をふみだしました。

今回このオーケストラを率いるのは、今世紀を代表する音楽家のひとり、レナード・バーンスタイン氏です。ご承知のとおり、バーンスタイン氏は、指揮者としてのみならず、作曲家、ピアニスト、教育家としても輝かしい足跡を残しております。今回の演奏会でも氏の作曲した作品が演奏されますので、必ずや皆様を魅了してくれるに違いありません。バーンスタイン氏と「イスラエル・フィル」の密接な関係は、1947年以来のことですが、近年の充実ぶりは目ざましく、この指揮者とのオーケストラならではの豊潤な響きを堪能させてくれるものと期待しております。

末筆ながら、遠来の芸術家各位を心より歓迎しますとともに、本演奏会の実現にご尽力いただきました民主音楽協会、朝日新聞社をはじめ、関係各位に厚く御礼を申し上げます。

財団法人 日本舞台芸術振興会
理事長 坊 秀男

HIDEO BOH
Chairman, Japan Performing Arts Foundation



二十世紀の巨星とも言ふべきレナード・バーンスタイン氏が古くから親密な関係にあるイスラエル・フィル（I P O）とのコンビを初めて日本の聴衆の前に披露してくれることになり、主催者としてこれ程の喜びはありません。

バーンスタイン氏の音楽活動は指揮者、作曲家、ピアニストとしても実に幅広く、我国でもレコードなどを通じて多くの作品や演奏が紹介されて参りました。

まだ日本にレコードでしか紹介されていない同氏とイスラエル・フィルとの息の合った演奏こそ、私共の永年の夢が実現したと言えましょう。

又、今回のプログラムにはバーンスタイン氏の自作や最も得意とするマーラーの作品を盛り込んだ熱の入った、円熟味あふれる演奏が期待できるものと確信しております。

最後に本公演にご協力下さいました関係各位に心から感謝申し上げます。

財団法人民主音楽協会

代表理事 姉小路公経

KIMITSUNE ANEKOI
President, the Min-On Concert Association



「イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」は1936年、ユダヤ系ポーランド人の名バイオリニスト、プロニスラフ・フーベルマンによって創設されました。ナチスに追われ、ヨーロッパ各国に散って行ったユダヤ系演奏家たちを結集するのが目的でした。第1回演奏会では、トスカニーニがタクトを振りました。つややかで繊細な弦の響きを特徴とし、わが国でも多くの音楽ファンに「弦のイスラエル・フィル」と親しまれてきています。

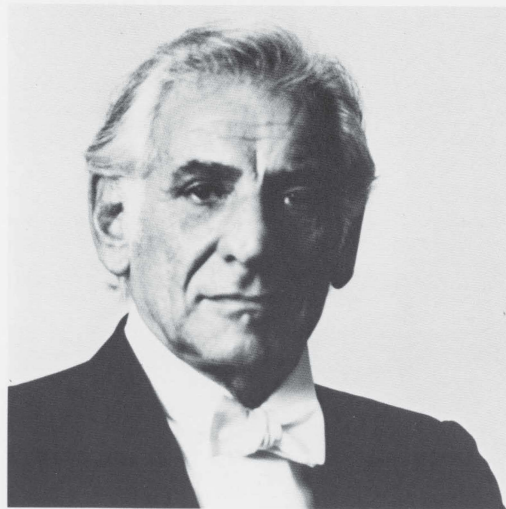
今回の来日は3度目で、指揮はアメリカの作曲家、ピアニストとしても有名なレナード・バーンスタインです。最近では、管楽器の演奏についても高く評価されるイスラエル・フィルですが、バーンスタインの指揮によって、一層輝きと重厚味が溢れ、その演奏はきっと私たちを魅了してくれることでしょう。

本公演の実現にご尽力頂きました日本舞台芸術振興会に心から敬意を表するとともに、ご協力を賜りました関係各位に厚くお礼申し上げます。

朝日新聞社

社長 一柳東一郎

TOICHIRO HITOTSUYANAGI
President, the Asahi Shimbun



1918年8月25日マサチューセッツ州ローレンスに生まれ、ボストンで育った。ヘレン・コーツ、ハインリヒ・ケッパードにピアノを学んだのち、1935年ハーヴァード大学に入学。ティルマン・メリット（理論）、ウォルター・ビストン（対位法）、エドワード・ヘル（管弦楽法）に師事した。さらにミトロプーロスの勧めによりカーティス音楽院にて勉強をつづけ、フリッツ・ライナーに学ぶ。1942年にタンクルウッドでクーセヴィツキーのアシスタントとなって研鑽を積み、翌43年にはロジンスキーの推薦によって、ニューヨーク・フィルの副指揮者になった。この年の11月14日、ブルーノ・ワルターの後で指揮し、劇的なデビューを飾って注目を浴びた。

1945年から48年まで、ニューヨーク・シティ交響楽団の指揮者となり、1957年から71年にかけて、ニューヨーク・フィルの「青少年コンサート」の音楽監督、指揮者をつとめた。1958年には同オーケストラの音楽監督に就任したが、アメリカに生まれ、アメリカに学んだ音楽家が、この重要なポストについては初めてだった。その後11年間にわたってこの地位にあり、演奏にレコーディングにとエネルギーな活動をつづけ、ニュー

ヨーク・フィルの黄金時代を築いた。

1969年、ニューヨーク・フィルの音楽監督の地位を辞任し、「桂冠指揮者」の称号を得て、その後も欧米においてめざましい指揮活動を展開し、ウィーン・フィルをはじめ各地の音楽祭に客演するとともに、ニューヨークのメトロポリタン、ミラノのスカラ座、ウィーンの国立歌劇場などでオペラの指揮をし、この分野でも高い評価を得ている。

バーンスタインの活躍は指揮だけにとどまらず、作曲家としては3つの交響曲、3つのバレエ音楽、2つのオペラ、合唱とオーケストラのための「チチェスター詩篇」、「セレナード」など、さまざまな様式の作品を創作しているほか、「ウェストサイド物語」などのミュージカルの傑作も世に送り出している。さらにピアニストとしても高く評価され、著者、教育者として、新しい世代の音楽ファンを育てている。バーンスタインはまさに時代が生んだ才人であり、その誰にも真似のできない幅広い活躍こそが、バーンスタインの音楽の魅力になって、人々の心を捉えている。



イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団

音楽監督：ズービン・メータ

●第1ヴァイオリン

ハイルム・タウブ
(コンサートマスター)
ウリ・ピアンカ
(コンサートマスター)
モシエ・メルヴィッツ
(コンサートマスター)
メナヘム・ブラアー
(コンサートマスター)
イズィア・ブラキエール
マリナ・ドルマン
ラファエル・フレンキエル
ロザ・イオスブ
ズィヴィ・カプラン
ラファエル・マルクス
アブラハム・メラメド
ロバート・モゼビス
ロン・ボラト
アンナ・ロスノフスキー
ツヴィ・セガル
エヴァ・シタウラ
モルデハイ・ユヴァル
パヤ・ユシム
マウリス・ザルマンヴィッチ

●第2ヴァイオリン

エリヤクム・ザルツマン
ラザール・シムタル
イグナツ・ケラズ
シメオン・アベロヴィッチ
シムシット・アルカレ
ヘンリク・ブレンデル
エリメンフ・エデルスタイン
イーガール・フィッシャー
ナウム・フルマン
セリタ・ゴールドンベルグ
ナタン・グリーンベルグ
レヴィア・ホフスタイン
エリザベス・クルツニク
カルマン・レヴィン
ヨラム・リヴネ
ヴォルフガング・ヴェルク

●ヴィオラ

ダニエル・ベニヤミニ
アリエ・イשראל
ミリアム・ハートマン
マイケル・アベルマン
アミツド・エルロイ
ガッド・エシュカール
ラファエル・カム
シモン・コバンスキー
アブラハム・レーヴェンタール
ツヴィ・リフツク
ナウム・ピンツク
アヴィraham・ローゼンブリット

●チェロ

マイケル・ハラシ
マルセル・ベルグマン
シュラミット・ロレン
ヨラム・アルベリン
ダヴィッド・バルネア
ハヴィル・ブラスバーク
エルハナン・ブレダマン
ナオミ・エノフ

●コントラバス

ナディ・クリンダ
ピーター・マルク
ツヴィ・ゾハル
ルース・アミール
ドヴィ・カッツ
ユリ・マゲン
ミハエル・ニツベルグ
ジェズゲニ・シャツキ
ガブリエル・ヴォール
ドヴィ・ヤーリ

●ハープ

ユディット・リベル
タミコ・イノウエ

●ピアノ / ハープシコード

ルート・メンゼ

●フルート

ダニエル・ミショ
ウリ・ショハム
ヨシ・アレンヘルム
ベツァレル・アヴィラム
ヘレツ・ヤロン
セルジオ・フェイダマン
●ピッコロ
ヘレツ・ヤロン
セルジオ・フェイダマン

●オーボエ

エリヤウ・トルナー
ハイルム・ユヴァル
ミヨル・グリーンベルグ
ヘルマン・ケッペンスタイン

●イングリッシュ・ホルン

ミヨル・グリーンベルグ

●クラリネット

リチャード・レセル
ヤコブ・バルネア
エリ・エバン
イスラエル・ゾハル

●ピッコロ・クラリネット

ヤコブ・バルネア
エリ・エバン

●バス・クラリネット

イスラエル・ゾハル

●バズーン

モルデハイ・レフタマン
ゼーブ・ドルマン
ヴォルター・メロツ
レスリイ・ラシンスキー

●コントラ・バズーン

レスリイ・ラシンスキー

●ホルン

ヤコブ・ミショ
ウリ・ショハム
ヨシ・アレンヘルム
ジェフリー・ラング
アナトール・クルツニク
サリ・モナ・メト
エズラ・モルホ
ジュセフ・ラビン
シロモ・ショハット

●トランペット

ケネット・コックス
イラン・アシュッド
ラファエル・グレーセル
ヨラム・レヴィ

●トロンボーン

ライ・バルネス
スチュワート・テイラー
エドムン・バスターナーク
ツヴィ・ロスノフスキー
●バス・トロンボーン
マツリット・イヴァ・グラブレル
ミハ・ディグリス

●チューバ

サミエル・ハルシー

●ティンパニ

ギダオン・スタイナー
アロン・ボール
●パーカッション
アロン・ボール
ガビ・ヘルシュコヴィツ
アヤル・ラフィア
エドムン・シヤロ

●ライブラリアン

マリリン・ステイナー

●ライブラリアン助手

エリイ・グフエン

●ステージ・マネージャー

ウヰイ・シュルター

●技術 助手

ヤコブ・カウマン



The Israel Philharmonic Orchestra

MUSIC DIRECTOR : ZUBIN MEHTA

First Violins

Chaim Taub
concertmaster*
Uri Pianka
concertmaster*
Moshe Murvitz
asst. concertmaster
Menahem Breuer
asst. concertmaster
Izla Brakier
Marina Dorman
Raphael Frankel
Rodica Iosub
Zinovi Kaplan
Raphael Markus
Avraham Melamed
Robert Mozes
Ron Porath
Anna Rosnovsky
Zvi Segal
Eva Strauss-Marko
Mordechai Yuval
Paya Yussim
Matos Zalmanovich

Second Violins

Elyakum Zaltsman*
Lazar Shuster*
Yitzhak Geras**
Shimeon Abalovitch
Shulamit Alkalay
Henry Brender
Elimelech Edelstein
Yigal Fisher
Nachum Fruman
Celita Goldenberg
Nathan Greenberg
Levia Hofstein
Elizabeth Krupnik
Kalman Levin
Yoram Livne
Wolfgang Valk

* Canada Concert-

master-Chair

** Principal

** Asst. Principal

◇ On Sabbatical

Violas

Daniel Benyamini*
Arie Israeli*
Miriam Hartman**
Michael Appelman
Avraham Bornstein
Amihud Elroy
Gad Eshkar
Rachel Kam
Shimon Koplanski
Avraham Levental
Zvi Litwak
Nahum Pinchuk
Avraham Rozenblith

Cellos

Michael Haran*
Marcel Bergman*
Shulamit Lorrain**
Yoram Alperin
David Barnea
Paul Blassberger
Elchanan Bregman
Naomi Enoch
Baruch Gross
Ya'acov Mense
Raphael Morag
Alla Yampolsky

Basses

Teddy Kling*
Peter Marck*
Zvi Zohar**
Ruth Amir
Dov Katz
Eli Magen
Michael Nitzberg
Yevgeny Shatzky
Gabriel Vole
Dov Yaari

Harp

Judith Liber*

Kumiko Inoue

Piano

and Harpsichord
Ruth Mense

Flutes

Uri Shoham*
Yossi Arnheim**
Bezalel Aviram
Peretz Yaron
Sergio Feidman

Piccolo

Peretz Yaron
Sergio Feidman

Oboes

Elihu Thorne*
Chaim Jouval**
Merrill Greenberg
Hermann Openstein

English Horn

Merrill Greenberg

Clarinets

Richard Lesser*
Yaakov Barnea**
Eli Eban
Israel Zohar

Piccolo Clarinet

Yaakov Barnea
Eli Eban

Bass Clarinet

Israel Zohar

Bassoons

Mordechai Rechtman*
Zeev Dorman**◇

Walter Meroz

Leslie Lashinsky

Contra Bassoon

Leslie Lashinsky

Horns

Ya'acov Mishori*
Meir Rimon*◇
Jeffrey Lang*
Anatol Krupnik
Sally-Ann Meth
Ezra Molcho
Yossef Rabin
Shelomo Shohat

Trumpets

Kenneth Cox*
Ilan Eshed**
Raphael Glaser
Yoram Levy

Trombones

Ray Parnes*
Stewart Taylor*
Yehoshua Pasternak**
Zvi Ostrowsky

Bass-Trombone

Matityahu Grabler
Micha Davis

Tuba

Shmuel Hershko*

Timpani

Gideon Steiner*
Alon Bor**

Percussion

Alon Bor*
Gabi Hershkovitch
Ayal Rafiah
Eitan Shapiro

Librarian:

Marilyn Steiner
Asst. Librarian:

Eli Gelen
Stage Manager:

Uzi Seltzer

Technical Asst.:

Yaakov Kaufman

IPO Management : D. Benyamini (Chm'n), E. Bregman, Y. Mishori

General Secretary : Avi Shoshani

Assistant to the Music Director : Shalom Ronly-Riklis

Musicians' Council : Y. Pasternak (Chm'n), M. Breuer, E. Eban, Y. Fisher, E. Thorne, G. Vole

Review Committee : Zvi Ostrowsky, Avraham Melamed

Supervisor : Ray Parnes • Inspector : Zvi Segal • Assembly Chm'n : P. Blassberger

Comptroller : Yochanan Ben-Ja'acov • Spokesman : Avraham Maron

Treasurer : Yael Zagouri • Subscription Dept. : Varda Zohar

IPO 理事会 : D. Benyamini (会長), E. Bregman, Y. Mishori

事務局長 : アヴィ・ショシュニ

音楽監督補佐 : シヤロム・ロニー・リクリス

演奏家評議会 : Y. Pasternak (会長), M. Breuer, E. Eban, Y. Fisher, E. Thorne, G. Vole

リヴィン・コティ : ツヴィ・オストロフスキー, アブラハム・メラメド

スーパーバイザー : ライ・バルネス • インспекター : ツヴィ・セガル • 会議議長 : P. Blassberger

監事 : ヨハナン・ベン・ヤコブ • スピークスマン : アブラハム・マロン

会計係 : ヤエル・ザグーリ • 予約部 : ヴァルダ・ゾハル

1936年2月29日、ニューヨーク・タイムスに次のような短い記事が載った。

「トスカニーニ、パレスチナの新しいオーケストラを指揮。同氏は10月にテル・アヴィヴで行われるオープニング・コンサートへの招きを受けるにあたり、ナチに迫害されたアーティストのために闘うことは自らに課せられた義務であると語った。このニュースは優れたポーランド人ヴァイオリニストであり、イスラエル・フィルハーモニック・オーケストラの創設者であるブロニスラフ・フーベルマン氏を通じて報道関係に発表された。ヨーロッパの行く手にある運命、特にユダヤ人の将来を感じとったフーベルマンは、中央ヨーロッパに在住の優れた音楽家の何人かにパレスチナに移住するように呼びかけた。当時のパレスチナは人口約40万人の国であった。フーベルマンは、中東の、当時パレスチナと呼ばれていた地を音楽活動の中心地にしたいという夢を描いていたのである。フーベルマンはパレスチナに到着してすぐに、パレスチナ交響楽団の結成にあたったのである。

若き指揮者ウィリアム・スタインバークが選ばれ、ヨーロッパからの亡命者（避難者）やもともと在住者70名から成るオーケストラのリハーサルを行ううち、トスカニーニが同地にやってきました。



フーベルマンとトスカニーニ、1936年

アルトゥーロ・トスカニーニがパレスチナを訪れ、1936年12月26日、その名指揮のもとでIPOの第1回演奏会が開催された。イスラエル・フィルハーモニックの誕生であった。

その後、イエルサレム、テル・アヴィヴ、及びハイファの主要都市で演奏会が続けられ、そしてIPOは第1回の国外公演としてパレスチナを出てエジプトを訪問した。フーベルマンのもうひとつの夢が実現したのである。こうした創立当初の活動以来IPOは、戦争のさ中でも絶えることなく公演活動を続け、国内国外合わせて年間200回を超えるコンサートを行っている。第2次世界大戦中、交通手段が軍関係のものに制限された時は、地元指揮者やソリストでコンサートを行った。時には指揮者なしでさえ演奏会を開いたことさえあった。新しいオーケストラが「自らを指揮する」力を発揮したのである。

オーケストラの歴史の中では、忘れ得ぬ、予期せぬ出来事がいくつか起こっている。1948年5月15日、イスラエル国家が成立し、この歴史的な日、パレスチナはイスラエルとなったのである。IPOは独立宣言式典に招かれて国歌を演奏することになったが、式典の会場が狭く、限られた人数しか会場に入ることができなかった。ベン・グリオンが独立宣言書を読み上げの中で、IPOは別の部屋で国歌「ハティクヴァ」を演奏し、さらに多くの人々への道路にあふれた。

また、1948年の独立戦争の間の短い休戦期間に、レナード・バーンスタインとオーケストラのメンバーは、包囲下のイエルサレムでのコンサートを予定通りに行おうと、テル・アヴィヴから45マイルの道のりを、危険なビルマ街道を通り8時間かけてたどり着いたこともあった。

数日後、再びバーンスタインの指揮で、解放されたベエルシェバの町で兵士たちのための特別コンサートが実施された。

1948年とはうって変わった穏やかな1959年、ユージン・オーマンディエー指揮、アイザック・スターンをヴァイオリニストに迎えて、新しくできたエイラットの町でIPOの野外コンサートが行われた。

六日戦争の時には、指揮者ズービン・メータ、テノールのリチャード・タッカー、ダニエル・バレンボイムとチェリストのジャクリーン・デュ・プレらが他の仕事をキャンセルしてまで

もIPOの演奏会に参加し、イスラエルの人々との連帯を表明した。

IPOの客演指揮者やソリストを列記すると、そのまま「音楽界史録」ができるほどにまでなった。トスカニーニを迎えての第1回のコンサート以来、世界の著名指揮者がIPOと共演している。まず、クーセヴィツキー、ミュンシュ、モントゥー、バルビローリ、ミトロポロスといった伝説的な名前に続いて、バーンスタイン、オーマンディエー、ショルティ、ジュリーニ、マゼール、バレンボイム、そして当然ながらIPOの音楽監督ズービン・メータらが挙げられる。

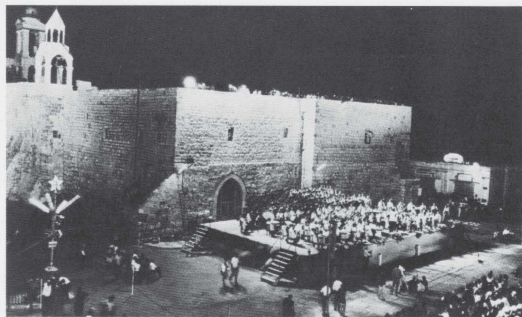
ソリストを列挙すると、フーベルマン、ハイフェッツ、ピアティゴルスキー、ルービンシュタイン、スターン、ロストロポフ・ヴィッチに加えてイスラエル人であるパールマン、ズッカーマン、バレンボイムなどいいる。ビヴァリー・シルズ、ハヴァ・ロッチ、レオンティン・アライスなどの優れた歌手もIPOの演奏会に華を添えた。永久客演アーティストの中にはイスラエル人指揮者、ソリストが多く含まれている。

IPOはイスラエルの上にしっかりと根を張り、努力を結集している。定期演奏会は、イエルサレム、テル・アヴィヴ、ハイファだけでなく、キブツ、国立公園、及びケサリアの古代ローマの円形劇場跡などでも行われている。ほとんどの演奏会にはイスラエル国防軍のメンバーが客として招かれている。

毎年の定期会員数は約35,000名。イスラエルの300万という人口を超える人口を持つ世界の大都市と比べても、大変に高い数字と言える。1981年の夏、メータとパールマンが領を合わせた。テル・アヴィヴのハヤルコン公演でのコンサートには20万人の聴衆が集まった。また、青少年層の音楽鑑賞教育のために毎年音楽会シリーズを行うというユニークな活動も行っている。

オーケストラは、フレデリック・R・マン記念講堂を本拠としている。これは1957年に設立された3,000席の、音響効果のすばらしいホールで、その建設基金を出資したF・R・マンにちなんで名づけられたものである。

1969年にズービン・メータが音楽顧問となり、10年後にはIPOとニューヨーク・フィルハーモニックの音楽監督に就任した。



ベテルヘムにおける野外コンサート

正規の楽団員数は110、うち15名が女性である。設立当初のころとは違い、現在の団員のほとんどがイスラエル生まれ、またはイスラエルで音楽教育を受けている。25名ほどがソビエトからの移住者で、アメリカ、アルゼンチン、その他の西欧諸国からも数名の移住者がいる。

最初の国際的公演旅行は1951年のアメリカ合衆国公演で、その後もヨーロッパ、南北アメリカ、オーストラリア、日本、インドなどの公演が続いている。鉄のカーテンの向こう側の国だけが未踏の地になっている。1966年にはソビエト公演が予定されていたが、間際になって「モスクワのホテル設備不足のため」中止となった。

ザルツブルグ、ルツェルン、エディンバラ、ベルリン、その他の音楽祭からの招きや、その他IPOがよく訪れる都市から、各シーズン常に招待の要請が続いている。

イスラエル・フィルは自主管理団体で、予算の60%は入場券売り上げでまかない、欠損の一部についてはイスラエル政府、アメリカ=イスラエル文化財団やその他の民間富裕層の援助を受けている。

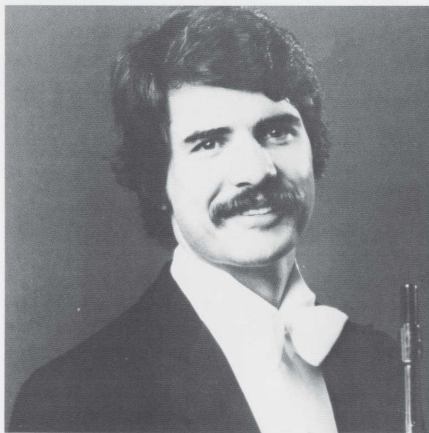
イスラエルの著名人から成るパブリック・ボード（公共理事會）が一般の利益を代表し、またオーケストラ団員は、オーケストラの諸問題を扱う経営委員会やその他の役員を団員の中から選ぶことができる。

最近、イスラエル・フィルハーモニック・ファウンデーションという新しい財団が設立された。アバ・エバを長とするこの財団は、オーケストラが国際的な高水準を保つのを助けることを目的としている。

ランサム・ウイルソン

RANSOM WILSON

●フルート独奏(「ハリル」)



名匠ランサム・ウイルソンをニューヨーク・タイムズは“現代の、いや、すべての時代の最高のフルート奏者の一人”と評した。北カロライナ芸術学院とジュリアード音楽学院をへて、フルブライト留学生としてフランスのジャンピエール・ランバルに師事。

フルートの独奏者としてアメリカ合衆国で数々のコンサート出演をした。1984年秋にはアジア、イタリアでも演奏した。サンフランシスコ・オーケストラやレナード・バーンスタインのイスラエル・フィルほか欧米の一流室内楽団などに定期的に客演している。最近ではリンカーン・センターでの“モストリー・モーツァルト・フェスティバル”に客演した。

旺盛な演奏活動やレコード録音のほかに、指揮者としての才能も高く評価されている。1981年にはアロの室内楽団であるソリスト・ニューヨークを設立し、ニューヨークで定期公演す

るだけでなく全米のツアー公演もしている。指揮者としてはロサンゼルス室内楽団、ジャクソンヴィル・シンフォニー、チェンバー・オーケストラ・ノースウエストを指揮して評判になった。オクラホマのハートルスヴィル・モーツァルト国際フェスティバルの芸術監督、コネチカット州ギルフォードのチェストナット・ヒル・コンサートの音楽監督でもある。

彼の独奏者および指揮者としての力量はグラミー賞候補になるほどの定評を得ている。

彼はまた編曲にも才能を見せ、現在オクスフォード大学出版局の企画にとり組んでいる。現代アメリカ音楽にも造詣が深く、スティーブ・ライクやキース・ジャレット等が彼のために作品を書いている。つい最近ではフルートと室内楽団のための新しい協奏曲の作曲にかかっている。

ハイム・タウブ

CHAIM TAUB

(コンサート・マスター)

●第1ヴァイオリン



1969年からIPOのコンサートマスターであるハイム・タウブは1959年に入団した。出身地はテル・アヴィブ。ここでオールドエン・ハルトスに師事、その後合衆国ではガラミアンに師事した。10年前まではピッツハーグ・シンフォニーのソリストであった。

イスラエル中のオーケストラはもちろんのこと、多くの海外公演にソリストとして客演している。テル・アヴィブ弦楽四重奏団の創立メンバー。

エリヤクム・ザルツマン

ELYAKUM ZALTMAN

●第2ヴァイオリン



1975年に入団。1980年より第2ヴァイオリンの副首席奏者となる。

1947年ヴィルナに生まれ、ヴィルナ音楽学院で学び、ヴィルナ・フィルのソリストであった。1974年イスラエルに移住、IPOのソリストになった。

ウリ・ピアンカ

URI PIANKA

(コンサート・マスター)

●第1ヴァイオリン



1969年よりコンサートマスターをつとめる。IPOには1959年入団。イスラエル出身。イスラエルで音楽を学んだ後、ニューヨークに渡り、ガラミアンとドロシー・デレイに師事した。ジュリアード音楽賞とベルギーのエリザベート・コンクールで優勝している。アメリカのブランディス大学で教えたこともある。

イスラエルの主なオーケストラは勿論、海外の演奏会にもソリストとして出演している。ユバールトリオの創立メンバーでもある。

ラザール・シュステル

LAZAR SHUSTER

●第2ヴァイオリン



1975年入団。1981年に第2ヴァイオリンの副首席奏者となる。出身地のルーマニアではモスクワのヤンケルビッチ教授に師事。モスクワ室内歌劇場のコンサートマスターをつとめた。

1975年にイスラエルに移住。テル・アヴィブ・ルビン音楽院でアンドレビスキー教授に師事した。

テル・アヴィブ四重奏団のメンバー。IPOをはじめ多くのイスラエルのオーケストラでソリストとして活躍している。

ダニエル・ベニヤミニー

DANIEL BENYAMINI

●ヴィオラ



1950年入団、1960年より首席ヴィオラ奏者と管理委員長を兼任する。テル・アヴィブ出身、イスラエルで音楽教育を受けた。1977年から1年間バリ管弦楽団の首席ヴィオラ奏者であった。ソリストとして、この楽団そして IPO とともに多くの録音にたずさわってきた。イスラエル五重奏団の創立メンバー。

アリエ・イスラエリ

ARIE ISRAELI

●ヴィオラ



1944年に入団、1956年から首席ヴィオラ奏者。イスラエルではボロショフ、スタイグリッツ、ブランバーク、ベルグマン、合衆国ではアリムローズに師事した。モンテカルロ、パレルモのテアトロ・マッシモ、ローマのサンタ・チェチリアほかフランコ・フェラーラのオーケストラなど数多くのオーケストラでソリストとして活躍してきた。IPOだけでなくイスラエルの一流楽団にも客演し、演奏会や室内楽団のリサイタルなどでも活発な演奏活動が続けている。

マイケル・ハラン

MICHAEL HARAN

●チェロ



首席チェロ奏者。1976年入団。エルサレムに生まれ地元の音楽学院卒業後はパリでナヴェラに師事、アメリカ合衆国でローズとグリーンハウスに師事した。IPO はもとより、イスラエルの内外で広く活躍、数々の国際的な賞を獲得している。指揮に当たることもあり、室内楽シリーズの制作・編集もこなしている。

マルセル・ベルグマン

MARCEL BERGMAN

●チェロ



首席チェロ奏者。1978年入団。ソ連に生まれ、レニングラード音楽学院を卒業、同学院で教えた。1978年にイスラエルに移住、IPO はかイスラエルの楽団に出演。イスラエル・ピアノ・トリオのメンバーでもある。

テディ・クリング

TEDDY KLING

●コントラバス



1970年入団、1979年に首席バスーン奏者に昇格。テル・アヴィブ出身、イスラエルで音楽教育を受けた。IPO の一員としてズービン・メータの下、ソリストとして活躍、室内楽団やジャズのグループとの共演もさかに行っている。

ピーター・マルク

PETER MARCK

●コントラバス



1976年入団、1978年に首席バスーン奏者になる。米国出身、トム・モナハンとフランコ・ペトラッキに師事した。イスラエルには1976年に移住。フィルハーモニック七重奏団と「不思議な楽器の歌」(ベース、チューバ、ピアノ)のメンバーであり、イスラエル・ピアノ五重奏団のゲストでもある。

ユディット・リベル

JUDITH LIBER

●ハーブ



ユディット・リベルは IPO をはじめ多くのイスラエルのオーケストラでハーブのソリストとして活躍している。1983年にはニューヨーク・フィルの全米縦断ツアーに客演している。

アメリカ合衆国出身、イスラエルには1963年に移住、同年 IPO の勤めて同団に首席ハーブ奏者として入団した。合衆国ではオバーリン音楽学院とイリノイ大学、オーストリアではザルツブルグ・モーツァルティウムで学び、ルーシー・ルイス、アリス・シャリアフ、アールロス・ナルセド等の名奏者の指導を受けた。

リサイタルや室内楽、レコード録音なども活発に行っている。イスラエル・ハーブ協会の副会長で、イスラエル国際ハーブ・コンテストでは審査員をつとめている。ルビン音楽院とテルマ・イエーリン芸術高校で後輩の指導に当たっている。

ウリ・ショハム

URI SHOHAM

●フルート



IPO の第1フルート奏者であるウリ・ショハムは1951年からこのメンバーである。1931年、ベンジャミンに生まれ、テル・アヴィブとエルサレムの音楽院で音楽教育を受けた。

ユリ・テプリッツにフルートを学び、後にパリでジョン・ピエール・ランバルと、そしてスイスではアンドレ・ジョーネットに学んだ。17才の時、ラジオ管弦楽団(コル・イスラエル)のフルートの第一者になった。彼は、IPO、エルサレム交響楽団にソリストとして出演した。またイスラエル・木管五重奏団ほかいくつかの室内合奏団のメンバーでもある。

1981年、パチカンの作曲家により指揮されたバーンスタインの「ハレル」では、ソリストであった。ウリ・ショハムはテル・アヴィブのルビン音楽院の教師でもある。

エリアウ・トルナー

ELIAHU THORNER

●オーボエ



長年 IPO の首席オーボエ奏者として活躍。IPO はもちろんイスラエル放送楽団でソリストとして演奏を続けてきている。イスラエル木管五重奏団のメンバーでもあり、イタリアのスポレートで開催された有名な「二世世界のフェスティバル」に出演して、イスラエル作曲家オエドエン・ハルトスの木管五重奏を演奏した。

加えてイスラエル放送局のために多くの室内音楽番組も録音してきている。テル・アヴィブのルビン音楽院の教師でもある。

出身はドイツでイスラエルとアメリカ合衆国で音楽を学んだ。1946年までイスラエル放送交響楽団のメンバーで、その後 IPO に入団。

モルデハイ・レフトマン

MORDECHAI RECHTMAN

●バスーン



1946年より IPO の首席バスーン奏者をつとめ、ソリストとしてイスラエル内外で演奏してきた。スポレート、マールボロ、カサルス、バンフなどのフェスティバルでもソリストとして出演。イスラエル木管五重奏団とイスラエル・フィルハーモニック木管アンサンブルの創始者であり音楽監督である。モントリオールの「グループ・コンチェルトンテ」の音楽監督でもある。

木管楽器の編曲家そして指揮者として国際的な定評がある。インディアナ大学の教壇に立ったこともあるが、現在はテル・アヴィブのルビン音楽院はじめ世界各地のマスター・クラスを教えている。

リチャード・レセ

RICHARD LESSER

●クラリネット



1966年入団、1968年に首席クラリネット奏者になった。合衆国ワシントン D. C. 出身、ロサンゼルスでカルマン・ブロックとミッチェル・ルリーに師事、フィラデルフィアの卒業校であるカーチス音楽学院ではアントニー・ジリオッティに師事した。四年連続夏のマールボロ音楽フェスティバルのメンバーをつとめ、この有名なフェスティバルに関連した LP 録音に加わっている。イスラエルに来る前はイーゴル・ストラヴィンスキーの指揮するコンピニア・シンフォニー・オーケストラの首席クラリネット奏者であった。テル・アヴィブのルビン音楽院の教師もつとめ、イスラエル木管五重奏団の一員でもある。

ヤアコブ・ミシヨリ

YA'ACOV MISHORI

●ホルン



首席ホルン奏者であると同時に IPO の役員でもある。テル・アヴィブ出身、同地とオランダで学んだ。ソリストとして青少年オーケストラ、ザハール・オーケストラ、ラジオ交響楽団などをへて IPO には1965年入団した。オランダ留学中(1962)はコンサートホウのゲスト奏者であった。IPO の国内、国外の活動にソリストとして参加のかたわら、フィルハーモニック金管五重奏団と「ハトール・イム」トリオのメンバーでもある。音楽に関する随筆や評論も国の内外でさんかに行っている。

メイル・リモン

MEIR RIMON

●ホルン



メイル・リモンは、IPO フレンチホルンの副首席奏者であり、ズーピン・メータ、ボール・バレー、ダニエル・バレンボムなどの指揮による IPO のソリストの出演もしている。また、彼はイスラエルを訪れるヨーロッパ、アメリカなどのオーケストラにもソリストとして出演している。彼はイスラエル木管クインテットのメンバーでもあり、また、フィルハーモニック・アンサンブルのコーディネーターでもある。国際ホルン協会で教え演奏しているが、1981年副会長にも選ばれた。1981年イスラエル外務省の後援でアフリカ旅行を行った。

メイル・リモンは1946年ビルナで生まれ、1957年イスラエルに定住した。彼はガドナ・オーケストラ、イスラエル・ラジオ・オーケストラ、ホルン室内オーケストラで仕事をしあとアメリカ・イスラエル文化基金の援助で留学した。1970年にイスラエルに戻り IPO に加わった。

ケネット・コックス

KENNETH COX

●トランペット

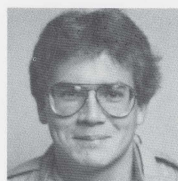


1955年合衆国に生まれる。クリーブランド・オーケストラのバーナード・アペルスタインに師事、インディアナ大学の音楽科を1978年に卒業した。1980年にはイエルサレム交響楽団の首席トランペット奏者になり、1984年には IPO の首席トランペット奏者になった。室内楽の方面でも積極的でイスラエルの多くの楽団に客演している。

ジェフレイ・ラング

JEFFREY LANG

●ホルン



ニュージャージー出身、1982年にジュリアード音楽学院を卒業、ニューヨーク・フィルの海外演奏旅行に加わり各地をまわるとともにニュージャージーのアヴェリー・フィッシャー・ホールでも演奏した。メトロポリタン・オペラ、スポレートやウォータールーのフェスティバルでも演奏している。現在 IPO の副首席ホルン奏者としての仕事の他に、ABC テレビやニューヨークのフリーの演奏活動に忙しい。

ライ・パルネス

RAY PARNES

●首席トロンボーン



IPO のトロンボーン首席奏者であるライ・パルネスも、ソリストとして演奏する。

彼はアメリカ・ケンタッキーの生まれで、ルイスビル大学の音楽課程を卒業し、1953年に高名な タングルウッドセミナーに出席している。

その後2年においてアメリカへ戻り、ルイスビルと後にはピッツバーグ・オーケストラでトロンボーン首席奏者として参加した。1958年イスラエルに戻り、それ以後 IPO と共に活動している。彼はまた、他のイスラエルのオーケストラにソリストとして参加し、現在イスラエル・フィルハーモニック・プラスクインテットとハトール・イムトリオの両方のメンバーでもある。

パルネスはまた、テル・アヴィブのルビン音楽院で教えている。

スチュワート・テイラー

STEWART TAYLOR

● トロンボーン



1983年5月よりIPOの副首席トロンボーン奏者である。同団以前の彼はモントリオール・シンフォニー（1975—1983）とニュージャージー・シンフォニー（1971—1975）に在籍していた。ほかにニューヨーク・フィル、メトロポリタン・オペラ、ニューヨーク・シティ・オペラ、そして数多くの室内楽団で演奏してきた。

1984年よりテル・アヴィブ大、ルビン音楽院で教えているが、1978年から5年間トロントのマギル大学でも教職に在った。

ギデオン・スタイナー

GIDEON STEINER

● ティンバニー



首席ティンバニー奏者。1939年イスラエルに生まれる。パーカッションとティンパニーをイスラエル、ヨーロッパ、アメリカに学ぶ。1960年にIPOに入団し、数多くの現代音楽の世界初演で演奏してきた。彼のために造られた曲もいくつかある。ルビン音楽院の教壇に立ったこともある。

シエムエル・ヘルシュコ

SHEMUEL HERSHKO

● チューバ



首席チューバ奏者。イスラエル出身。アメリカン・イスラエル文化基金の奨学生として合衆国で学び、有名なチューバ奏者ロジャー・ボボに師事した。

ヘルシュコは1978年にIPOに入団、同団での活動に加えて、フィルハーモニック・プラス、クインテットや彼自身が創立メンバーである“不思議な楽器の歌”楽団で（コントラバス、チューバ、ピアノ）も演奏している。チューバやピアノのリサイタルには頻繁に出演している。

アロン・ボール

ALON BOR

● パーカッション



1952年イスラエルに生まれ、パーカッションをイスラエルとアメリカで学ぶ。1970年に入団。パーカッション・セクションの首席とティンパニー・セクションの副首席をつとめる。ルビン音楽院のパーカッション部の主任教授でもある。

Program



角評言説 / 平野 昭

■グスタフ・マーラー（1860～1911）

交響曲第9番ニ長調

「マーラーは“1900年”という魔術の日付変更線をまたいで繰え立つ巨人というイメージを喚起する。心臓に直結する左足は確固としてあの豊かな愛すべき19世紀を踏みしめ、右足は幾分ふらつきながらも20世紀の確かな足場を求めている」とはL. バーンスタインの語った言葉である。極めて意味深長な名言である。確かにここにはバーンスタインのマーラー評価がある。19世紀に重きを置くのは今日の常識的解釈であるが、20世紀に踏み込んだ右脚がふらついているのか、既にしっかりと踏みしめているのか、判断は個々の価値観や観点の相違により異なってくるだろう。また、いわゆる“20世紀音楽”の開花期をどの時点にとるかによっては、1911年に世を去ったマーラーをどの程度まで“20世紀音楽”の中で扱いうるかという意地悪い疑問を呈する人がいないとは限らない。しかし、この問題は個性に関わる問題である。例えばマーラーより13年遅く生まれ、今世紀半ばまで活躍したラフマニノフ（1873～1943）は完全に19世紀タイプの音楽家であったし、一方同世代のシェーンベルク（1874～1951）は言うまでもなく今世紀の最も重要な音楽家である。極端な比較例であるが、作曲家がどの時代に生まれ、いつ活躍したかということより、その個性、否、意識の面から見た場合にバーンスタインの語った「両世紀をまたぐ巨人」という言葉は卓見と言わざるを得ない。

マーラーの音楽には親しみやすく美しい旋律が少なくない。が、一方で過剰な感傷性ややりきれない絶望感に満ちた瞬間があるのも事実である。そうした箇所は如何に演奏解釈を究めようと、さらに絶望感が深まるだけである。しかしバーンスタインは言う。「全曲が終った瞬間に我々は浄化される。疲労困憊せず、また浄化されることなく交響曲第9番」を聴き終えるということは、少なくとも感受性をもつ人ならあり得ない」と。

マーラーが「第9番」という番号をかなり意識していたことは衆知のとおりである。ベートーヴェンの最後の交響曲となった数であり、またもっと身近に知っていたブルックナーが未完のまま死の数時間前まで書き続けていたのが「第9番」であっ

た。10数人の兄弟の大半を幼児期に失い、すぐ下の弟は盲目と心臓病で13歳の時に死。音楽家を志した別の弟は22歳でピストル自殺をするというように身内の死を目のあたりにしてきたのである。そして、ついに愛娘マリーア・アンナを1907年7月5日に病死させているのである。かねてから自分の健康もすぐれず、しばしば医者通いをしていた彼であったが、溺愛していた5歳の娘を亡くした数日後、彼自身から心臓発作で倒れ、医師の診断により「先天性、両側性代償性心臓介膜症」の宣告を受けたのであった。少年期から人の死を身近に見続けてきた彼は、モーツァルトのように死を人生の最終目的とか最良の友と考えることはできなかった。死に対する恐怖は病的なまで強められていったのである。そうした彼であるからこそ、「第9番目」の交響曲を書くことは人生との告別を意味するような強迫観念にとらわれたのであった。その結果、「第8番<千人の交響曲>」の次に完成させた（二人の独唱者を伴う大管弦楽のための交響曲）を番号のつかない「大地の歌」として仕立てたのであった。

結果的には「第9番」の番号を採用してこの作品を書くことになるのだが、その時に彼が現世との訣別を全く考えなかったとは言えない。むしろ先天的な心臓病のあることを既に知った彼であるから、現世への諦観を少なからず感じていたと考えるほうが自然かも知れない。事実、「第9」を完成させ、10番目の交響曲を書き始めてその完成を待たずに彼は世を去ったのであった。

永年務めたウィーン宮廷歌劇場指揮者を辞任し多くの人々に惜しまれながら彼は1907年12月9日にウィーンを去ったのである。1908年1月1日には早くも新しい活躍の地となるアメリカでメトロポリタン歌劇場の指揮団に立ちヴァーグナーの楽劇「トリスタンとイゾルダ」を上演している。演奏活動の中心はニューヨークに移ったとは言え、大西洋を何度も往復し、ヨーロッパでの演奏も続けていた。1908年の夏には「大地の歌」が完成されている。1909年春シーズンでメトロポリタンとの契約が切れ、夏にはアムステルダムでの演奏会を開いたのちドローテン山地のアルト・シュルダーバッハで「第9」に着手し、一気に書き続けている。この作曲が充実していたことは、作曲中の8月下旬にしばしばここを訪れたR. シュトラウスに宛てた9月末の手紙にも窺える。10月に戻ったニューヨークで



グスタフ・マーラー（1860年ハンブルクにて）



マラーのカリカチュア

は完成させている。ブルーノ・ヴァルターとの手紙のやりとりから、冬のうちにスコアを最終的に仕上げる予定であったことがわかるが、結局スコアが仕上がったのは1910年4月1日直前であったことがヴァルターへの手紙で報告されている。

初演は遅れて、生前にマラーは自作を聴くことはできなかった。初演の指揮者は既にマラーの死後「大地の歌」をミュンヘンで初演（1911年11月20日）していたブルーノ・ヴァルターにより、1912年6月26日にウィーンで行なわれた。

完成された最後の交響曲となったこの作品でマラーは再び4楽章構成に立ち戻り、また声楽を排して伝統的な交響曲の形式を採用している。技法・語法の問題を棚上げにして概観するならば、第1楽章はソナタ形式。第2楽章はスケルツォ。第3楽章はロンドそして第4楽章はアダージョで独自の変奏形式を用いている。楽章序列の上から見れば、第1楽章がアンダンテ・コン・モートであり、緩—急—緩のシメトリーを成している。

第1楽章 アンダンテ・コン・モート 二長調 ♩拍子。チェロが、次いでホルンが低音域に静かに属音を奏すると、しっかりとした足どりでページを示す展開で重要な役割を果たす音形（短3度と長2度進行）を示す。これをホルンがもうひとつの重要な音形（完全4度と完全5度）で引き継いで始まる。下降する長2度動機は楽章全体を支配する最も重要な素材で、遠くベートーヴェンの《告别ソナタ》（Op.81a）のモットーを意識の底に潜在させている。友人シェーンベルクの無調時代の「第

1室内交響曲」（1906年）の書法を感じさせ、後のベルクやヴェーベルンの作品の構成を先取りするとも評されるこの楽章は、454小節からなる。

第2楽章 気楽なレンドラーのテンポで、やや武骨に、そして非常にたくましく（ドイツ語表記）ハ長調 ♩拍子。前楽章の内容と著しいコントラストをなすこの楽章はマラーの親しみやすい音楽を聴かせる。レンドラーの形をとったスケルツォ楽章と言えよう。しかし、マラーのレンドラーは単純朴訥なブルックナーのそれとは異なり、ここでも独自の奇妙なテンポ上の構成がとられている。ややテンポを上げるホ長調部（第IIテンポ）はワルツの趣をもつ。このあと第Iテンポ、第IIテンポの部分が続き、第IIIテンポではよりゆっくりとしたレンドラーに戻される。さらに何度もテンポを変えていく621小節のスケルツォを構成していく。

第3楽章 ロンド・ブルレスケ アレグロ・アッサイ、極めて反動的に（ドイツ語表記）短調 ♩拍子。激しい情熱に満ちたこの楽章は極めて多くの楽想が見事なポリフォニーの中に織り込まれて現われる。構成や素材面で彼の「第1」「第3」「第5」交響曲からの引用などを指摘することもできるが、それにしても多くの楽想は彼が生涯をふり返っているような印象を受ける。タイトルの「ブルレスケ」は「道化芝居」を意味するものであり、マラーが自己の生涯をカリカチュアライズしたものと言えよう。667小節。

第4楽章 アダージョ 変ニ長調 ♩拍子。「大地の歌」の最終楽章《告别》と密接な関連をもっていた第1楽章に対し、この終楽章は完全に「現世との訣別」を思わせる。第1楽章下降動機から発展した主題の末尾には「子供の死の歌」（亡き子を偲ぶ歌）の第4曲の「私はふと思うのだ、子供たちはちょっと出掛けただけなのだ」とからの引用が用いられている。

透徹した響をもつ弦楽合奏を主体にして、和声法と対位法技法を見事に融合させた美しい響の中で冒頭11小節で提示された主題が12回にわたり独自の性格をもって変奏されてゆく。マラーの全作品中における最大の傑作とされるこのアダージョで曲は閉じられる。「息が絶えるように」とされた変長調主題音がpppのフェルマータで消え入るのは第185小節。

■レナード・バーンスタイン（1918年8月25日生れ）

「ハリル」 ソロ・フルート、弦楽アンサンブル、打楽器のためのノクターン

平和主義者バーンスタインのこのところの反核・反戦をスローガンにした活動は、ついひと月ほど前に「広島平和コンサート」で象徴的に示されたとおりであるが、こうした彼の姿勢はいまに始まったわけではない。それは彼の多くの宗教的作品ないし信仰の危機をあつかった作品に早くから窺われたものである。

ヘブライ語でフルートを意味する「ハリルHALIL」をタイトルとしてもつこの作品も、平和を希求した音楽である。完成されたのは1981年で、その年の5月23日にエルサレムで演奏され、4日後の5月27日にはテル・アヴィヴのフレデリック・マン・ホールで公開の世界初演がなされている。作曲家自身の指揮でP・ランバルを独奏者に招いてイスラエル・フィルによる初演であった。アメリカでも同年7月4日にタングルウッドで作曲家の指揮によるボストン交響楽団により演奏されている。

15分ほどのこの作品は若くして死んだひとりの芸術家の思いでのために書かれたものである。その芸術家とは非常に才能に恵まれたイスラエルのフルーティスト、ヤディン・タネンバウムであった。ヤディンは1973年、19才のときにシナイの戦闘に従軍して、戦車の中で命を奪われたのであった。平和のために若い命をさげたヤディンの運命に感銘してバーンスタインは筆をとったのである。

バーンスタインの管弦楽曲は規模の大小に拘らず、どの作品においても彼の思考テーマに合った表現形態を生み出している。そのテーマは作品の出発点に過ぎないのであって、純粹に音楽的な観点から作品は理解されねばならないが、そのテーマが作品の構成自体に力を及ぼしていることも確かである。「ハリル」に寄せてバーンスタイン自身の言葉を記そう。

「ハリル」は形式的には私がこれまで書いてきたどの作品とも似ていない。しかし、その調性的な力と非調性的な力との間の闘争という点においては私の音楽の多くと共通したものをもっている。この曲の場合、私はその闘争を戦争及び戦争の恐怖、

生への強い願望、芸術と愛の慰め、そして平和への希望といったものを内包するものとして感じている」と述べている。

開始部の12音列から全音階的な最後のカデンツァに至るまでノクターンのイメージでの葛藤が連続的に展開されてゆく。その葛藤は「叶ってほしい夢、悪夢、急速、眠むられぬ夜、夜の恐怖、そして死と双子の兄弟のように隣り合わせの眠りそのもの」を描いてゆくのである。

最後にバーンスタインは言う、「私はヤディン・タネンバウムに会ったことはない。しかし、私は彼の魂を知っている」と。作品は「ヤディンとその倒れた同朋の魂に」献呈されている。

（HALILは、日本語では「ハリル」と表記しているが、HALは通常の「ハ」よりも強く発音する）

■レナード・バーンスタイン

「ウエストサイド物語」より「シンフォニック・ダンス」

作曲家バーンスタイン像が今日なお明確に打ち立てられているとは言い難い。指揮者、ピアニスト、啓蒙家といった多彩な活動が作曲家としての彼の姿を隠してしまっているとも言える。1935年の《詩篇148番》を作曲家としての公式な第1作と見るならば、彼の創作は今年でちょうど半世紀間にあふことになる。3つの交響曲（第1番《エレミア》1942年、第2番《不安の時代》1949年、第3番《カディシュ》1963年）が、いわゆるクラシック・ファンには良く知られた代表作であることに相違はないが、これまでに公にされた約80曲に達する彼の作品の全貌をこれだけで評価するわけにはゆかない。そうした中で、彼がアメリカの吾、世界のミュージカル史の流れを一新させる画期的作品を生み出してきたことは既に認められたことである。

〈オン・ザ・タウン〉1944年、〈ワンダフル・タウン〉1952年、〈キャンディード（コミック・オペレッタ）〉1950年、〈ウエストサイド物語〉1957年の4つの作品が今世紀半のミュージカル史に果した貢献の大ききには測りしれないものがある。確かに彼は、〈ミサ〉1972年、〈メンシルヴァニア街1600番地〉1976年の2作を加えても既作ミュージカルは金6作ということで、作品数からすれば多作家のR、ロジャースやC、ポーター等には及ばない。しかし、1960年代に入ってからJ、ボックの〈屋

根の上のヴァイオリン弾き」、M. リーの〈ラ・マンチャの男〉、さらには70年代のA. ロイド・ウェバーの〈ジーザス・クライスト・スーパースター〉等の誕生は〈ウェストサイド物語〉の存在なしには考えられないものである。

1957年9月26日初演以来ブロードウェイで爆発的にヒットを飛ばしてから、4半世紀以上になっても人気を保ち続けている〈ウェストサイド物語〉のストーリーは今更紹介するまでもないだろう。シェークスピアの原作「ロメオとジュリエット」を現代アメリカ社会のかかえる種々の問題、都会というジャングルにおける貧困と人種差別と非行と暴力、さらには大人と青少年の断絶、相互理解の欠陥といった社会問題を底流に、対立し合う愚連隊の首領と相手方の首領の妹との間における恋愛悲劇に翻案したものである。

重要なのは、ストーリーよりも音楽それ自体にある。バーンスタインが〈オン・ザ・タウン〉以降追及してきたものがこの作品で見事な結晶を結んでいる。ひと言でいえば、それはヨーロッパの伝統的芸術音楽、とりわけオペラと、アメリカの伝統的なミュージカルとの融合であった。複雑なヴォーカル・アンサンブル、いわゆるライヴ・モーター技法の採用、そして、とりわけ全篇を貫く交響的展開と、西洋音楽史の中で「音楽における悪魔」とまで呼ばれる最も危険な音程である3全音(増4度)がトニーとマリアの不安定な関係あるいはジェッツ派とシャークス派の危険な対立や残忍さを象徴する重要な要素として用いられるなどはヨーロッパ音楽の影響と見ることができ、一方、リズムや音色におけるジャズ音楽語法にアメリカの伝統が生かされているのである。

〈シンフォニック・ダンス〉はシッド・レイミンとアーウィン・コストルの協力を得て1960年に編曲したものである。全篇中から舞踏場面の音楽を中心にした9曲からなる一種の組曲として編まれている。

1. **プロローグ**：アレグロ・モデラート 2つの不良少年グループ、ジェッツとシャークスの敵対感の高まり。
2. **「どこかに」**：アダージョ 2つのグループが手に手をとって一緒に過ごせる日かいつかやってくるという空想にふける少女のダンス・シーン。



レナード・バーンスタイン

3. **スケルツォ**：ヴィヴァーチェ・レジェーロ 「トニーとマリア」が何処かに自由な土地がある、と歌う場面に続き、少年たちが街の壁を突き抜け広々とした新鮮な空気と太陽のふり注ぐ世界を見出す。
4. **マンボ**：プレスト 再び現実に戻り、グループの対立。
5. **チャ・チャ**：アンダンティーノ・コン・グラツィア 星回りの悪い恋人たちが一緒に踊る。
6. **「出合いの場面」**：メーノ・モッソ トニーとマリアの最初の言葉を音楽が飾り立てる。
7. **「クール」**：フーガ・アレグレッツォ ジェッツは敵対意識を捨てて。
8. **「乱闘」**：モルト・アレグロ 両グループのリーダー、ベルナルドとトリクの死を招く決闘場面。攻撃のクライマックス。
9. **フィナーレ** アダージョ 愛の音楽が展開され、儀式的行列の曲となる。悲劇的現実の中に「どこかに」の架空の楽園的状况を思い起こす。

■ヨハネス・ブラームス (1833~97)

交響曲第1番 ハ短調 作品68

ハイドンやモーツァルトを中心とした古典派の作曲家たちが完成させていった交響曲の歴史の上にベートーヴェンの9曲が果たした革命的な変化は、彼以後の作曲家にもはや古典様式に基づく交響曲創作を断念せざるを得ないほどの絶対的な存在となるかに思われた。ベートーヴェンの9曲を質的に音楽内容的に超越する作品を生むことは不可能に近いという観念を抱かせたのである。交響曲が古典様式とは異を新たにして再び隆盛を見るのは19世紀後半になってからであった。後期ロマン派の色彩を濃く盛り込んだり、民族主義的内容をもたせたり、あるいは文学的内容を重視して、オーケストラの編成を超大化させるという方法で個性的表現を追及していたドヴォルザーク、チャイコフスキー、ブルックナー、そしてマーラーといった人々が新しい交響曲様式を再建していった。

こうした19世紀後半の流れの中にあって、ベートーヴェンの様式に果敢に挑戦して大きな成功を取めたのがブラームスであった。しかし、ブラームスにとってもこの挑戦は手易いことではなかった。「第1交響曲」の創作は起草から脱稿まで20年以上を要したのであった。22才のときに交響曲創作を思っていたが、ただちに筆が進められたわけではない。最初の交響曲の構想は「ピアノ協奏曲第1番」にとって代わられている。しかし、29才の時には「第1楽章」の草稿を完成させていた。その後、多くの室内楽や管弦楽作品で確実な作曲技法を身につけたブラームスは41才頃になって再び本格的な交響曲創作に情熱を傾けるようになったのである。そして1876年9月(43才)のときには、当時の名指揮者ハンス・フォン・ビューローをして、「ベートーヴェンの不滅の9曲に次ぐ第10番」の誕生と言わしめたこの作品を完成させたのである。

第1楽章 ウン・ボコ・ソステヌート ハ短調 3/4拍子。全オーケストラの強奏による悲劇的緊張感をたたえた長大な序奏部はその緻密な構成の中に全曲を統一する基本動機をも提示する。アレグロの主部は半音階的に上昇する鋭い木管音形に始まり、弦楽部が第1主題を提示する。第2主題はファゴットやクラリ



散歩の途中のブラームスと女官



ヨハネス・ブラームス

ネットの伴奏音形を伴い、オーボエにより何かを哀願するような感動的主题となる。

第2楽章 アンダンテ・ソステヌート ホ長調 3/4拍子。第1楽章に対して長3度高い長調を選ぶという意欲を見せる。長調ではあるが、半音階的に動く第1楽章の基本動機をとり入れている主題は決して明るくだけではない。

第3楽章 ウン・ボコ・アレグレッツォ・エ・グラツィオソ 変イ長調 3/4拍子。変イ長調は異名同音的に読み換えば嬰ト長調ということになる。つまり、またしても前楽章から長3度(記譜上は減4度)高い調性が選ばれている。伝統の様式を重んじるブラームスであったが、この楽章はトリオ部(ロ長調、3拍子)をもつとはいえ、伝統的なメヌエットでもスケルツォでもなく、独自なロマンス風楽曲をつくっている。

第4楽章 アダージョ ハ短調 3拍子—ビウ・アンダンテ—アレグロ・ノン・トロppo・マ・コン・ブリオ ハ長調 3拍子。前楽章(変イ長調)より長3度高いハ音を主音とする調に回帰していることは言うまでもない。金管の響け生み出すスケールの大きな序奏部が前楽章までを総括し、時に第1楽章の悲劇的な趣までも回想する。アレグロ主部は、「闘争を経て勝利に至る」というベートーヴェンの「運命」交響曲の図式と同じように、同主長調のハ長調で構成される。その主題はしばしばベートーヴェンの「第9」の〈歓喜主題〉に比される頌歌風なものである。第2主題はその跳躍音形にもかかわらず、穏やかな表情をもってヴァイオリンに呈示される。形式的な展開部は置かれず、再現部の中で実質的な主題の展開が見られる。オルガン風な荘厳さをもつコラールの楽想も現れるコーダでは緊迫したハ長調音の連打で力強く曲を閉じてゆく。

「ウェストサイド・ストーリー」は20年以上もまえに、映画を見て感動し、しばらくしてアメリカの役者をまじえた舞台を見てこれまでに楽しんだ。むしろ抜粋のレコードも聞いて、バーンスタインの作曲家としての力量に感じ入ったものだった。

それでこんどポリドールから出た作曲者の指揮による初の全曲盤（ドイツ・グラモフォン43MG0859-60）も楽しみにして耳をあてた。そしてこれはミュージカルの稀代の傑作であることを改めて強く確認したものだ。ひとくちに言えば舞台なしに、つまり音楽そのものとして聞いていられるということである。音楽としてひとり立ちできる内容を備えた作品ということである。ミュージカルについて私はいこうに明るくないのだが、これは例外に属することではないだろうか。

キリ・テ・カナワ、ホセ・カレーラスを動員した演奏としての出来ばえもさることながら、この2枚組を通して最も惹かれたのは、いくつかのダイナミックなダンス・ナンバーで、そこには大胆で新鮮な刺激が充満している。生きいきとした自発性と内発性が息づいていて、どれも魅力ある表現を届け、耳を捉えて離さない。しかもドラマのシチュエーションと人物の心理にびたり照応しているのも見事なものといえよう。映画やステージの記憶のせいもあるろう、聞くうちにあれこれのシーンが見えてくるようで、バーンスタインの卓抜な劇場感覚を思い知らされたのである。

これらダンス・ナンバーの核をなしているのは動きの感覚ではないかと思う。ここでバーンスタインの音楽は実によく動いているのである。音楽は鳴って動くものだが、私がいうのはそのことではなく、もっと音楽表現の根本の問題であるというまでもない。「ウェストサイド・ストーリー」の作曲の筆を運ぶバーンスタインの内面には生きいきとして、それこそダイナミックなものが突き上げるように躍動していたはずである。自分の内なる深部から湧き上り、噴き上げるように出来たのではないかと聞かせるのである。このレコード・ジャケットには作曲を控えたころのバーンスタインの日記が抄録されているが、1955年4月のある日のくだりに、脚本家アーサー・ローレンツと打合わせしているうちに「……突然、すべてが生いききてきた。リズムと躍動が聞こえるようだ……」と書いている。

この予感はそのまま実現されたというのが私の実感である。かくして「ウェストサイド・ストーリー」は「ロメオとジュリエット」を下敷きとしながらも、現代的で、ヴィヴィッドな若者の風俗を活写することに成功したのである。

こうした活力あふれるナンバーのいっぽう、柔い抒情的な音楽でもバーンスタインは魅力的である。トニーとマリアの「出会いの場面」のチャチャなど、ぞくぞくするほどチャミングなときめきが感じられるし、つづく「マリア」、さらには「トゥナイト」の魅力は誰れも御存知だろう。「アイ・フィール・ブリティ」も浮きうきした喜びが脈打っている。

以上のすべてを通じて「ウェストサイド・ストーリー」が誰の音楽を思い出させることがないのは立派である。つまりこれはバーンスタイン独自の音楽なのである。これだけわかりやすく、しかも俗に落ちぬ音楽を書いた指揮者（これかやればバーンスタインの表芸だろうから）は極めて珍しいといわなければならぬ。ついでに言えばバーンスタインはよく知られる3つの交響曲、ミュージカル「キャンディード」のほかにもたくさん作品があって、僅に一人まえの作曲家というに足る。これだけ解釈（指揮）と創出（作曲）の両面にすぐれた手腕を発揮した音楽家は現代にあっては例外中の例外とすべきだと思う。ベームもカラヤンも作曲という点では零である。

このへんでその解釈のほうにも少し触れておこう。最近、私が聞いた指揮者バーンスタインはモーツァルトの交響曲・第40番（28MG0769 第39番も入っている）、ハイドンの第92番「オックスフォード」（28MG0770 「V字」も聞ける）、それとストラヴィンスキーの「火の鳥」、プルチネルラの両組曲である（28MG0852）。

いつも思うのだが、指揮に聞くバーンスタインはひとくちにいうとロマンティストである。バーンスタインにとって音楽は憧れの的であり、夢と理想の対象である。バーンスタインは音楽に対していつも燃える心をもって挑んでいる。燃焼こそが終極の目的だと信じて疑わない音楽家に属する。具体的に言えばその演奏は無機能的・人工的に傾くことがなく、音にはぬくもりがあり、音色は暖色系のものである。音の感覚性が独り歩きすることもない。そして音楽の運びには豊かな起伏があり、呼吸

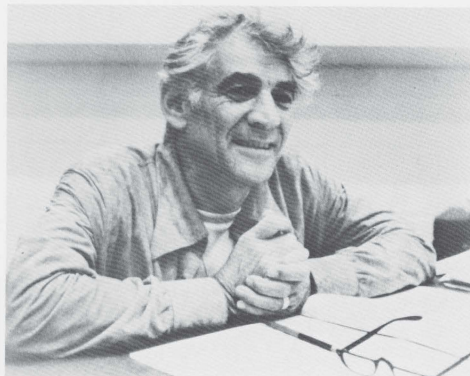
が息づいていて、歌のよろこびがこめられている。そこからは熱い思いも届いてくる。いふなればカロリーの高い、ヴォルテージの高い音楽をやるのがバーンスタインであり、それは生命の謳歌、人間への賛歌とも聞こえるようである。人間性の飽くなき伸張と拡充を目ざすのが指揮者バーンスタインなのである。

以上のことは前述の3枚からも聞き取れるのだが、ハイドンとモーツァルトについていうと、いずれも最終楽章が最も聞きごたえがあるという点かいかにもバーンスタインふうだと思う。作品を締めくくる大詰めのクライマックスたるフィナーレでバーンスタインはロマンティストたるの真面目を遺憾なく発揮するのである。モーツァルトの40番はやや早めのテンポでたたみかけ、そこから烈しい表情を噴き出させている。テンポを早くすることで音の連なりにに圧力をかけ、密度を仕込み、そこから目くるめく表情を引き出してみせる。パッションで底力のこもったフィナーレといつていい。とくに展開部での深い交錯、逆巻く表情は説得力がある。以上を要するに生の充溢。これを「ウェストサイド・ストーリー」に引きつけていえば「動き」の重視から導き出されたものといえよう。

この「動き」の効果はハイドンの「オックスフォード」の第4楽章でも顕著をあげている。すたすたとした軽やかな運びのなかからエネルギーな迫力がはらばり出て、旺盛で若々しい音楽が躍動している。鋭いドライブ、豊かな前進性の魅力が横溢しているのである。

「火の鳥」については「王女たちのロンド」のふわわとして雰囲気あつたぶりのロマンティズムと、つづく「カスチエイ王の魔の踊り」の強烈・隆々としたドラマティズム、いいかえれば「女性」性と「男性」性のコントラストの効果だけを指摘しておこう。「プルチネルラ」もバーンスタインの手にかかると新古典主義の現代音楽というよりはロマンティックな音楽に聞こえる。柔い音色、旋律の重視がそうさせている。つまり抒情的なのである。むしろリズムの活力も忘れていいない。

以上に見て来たバーンスタインの「動き」ある仕事ぶりは作曲や演奏にとどまるものでなく、その現実的な行動についてもいえることだと思う。去る8月6日と7日、被爆40周年を記念し、ヨーロッパと日本の若者によって広島で行なわれた平和の



レナード・バーンスタイン

ためのコンサートはバーンスタインの現実への積極的な働きかけのひとつだし、たしか2年まえ、反核の腕章をつけて、ボストン・ユース・オーケストラを振ったコンサートは核軍縮のために捧げられたものだったと記憶する。さらにさかのぼって6年まえ日本に来たときは、政治犯救援運動であるアムネスティ・インターナショナルの日本支部の求めに応じてソニービルでサイン会を開き、収益を運動に贈るいっぽう、アムネスティ運動の必要性を説いていたのも思い出す。その少しまえにはミュンヘンでアムネスティ運動のためにチャリティ・コンサートを開き、そのときのライブ・レコードをチャリティ・レコードとしたこともあったように思う。チェコで行なわれている弾圧に抗議して「プラハの春'78」への参加を取消したこともそれと相前後していたと思う。黒人運動支持のキャンパスに立ったこともあるし、ベトナム戦争に反対行動をとったこともあった。

こうした表現と現実行動における「動き」のうしろにダイナミックで知的なバーンスタインの多角的で全人的な人柄を見ることができただけ、それを貫くものは何にもまして強い人間主義的な姿勢だと思うのである。

1947年5月のはじめ、聖都エルサレムでパレスチナ交響楽団のコンサートが行なわれた。まだコンサート・ホールもない頃で、演奏会場にあてられたのは古びた巨大な映画館「エジソン・ホール」だった。映画館をとり囲んだ無数の群衆のうち、ほんのわずかな人々が入場することができた。コンサートが予定より15分遅れて始まったとき、通路も側面も音楽ファンによって埋まっていた。

その日はアメリカの俊英レナード・バーンスタイン(28)のパレスチナ警初登場だった。当時「レニー」の愛称で親しまれていたバーンスタインの名声は聖都にまでとどろいていたのである。それにしても、このような熱狂ぶりは空前のことだった。熱烈な歓迎はバーンスタインのなかにあるユダヤ系としてのプライドを高揚するものがあつた：事実、聴衆のすべてがユダヤ人だった——ひとりの英兵も、警官も、役人すらいなかったのだ。

バーンスタインが早速でステージに現われた瞬間、拍手喝采の波が押し寄せてきて、彼がオーケストラのほうに向きを変え、両手を上げてシューマンの《交響曲第2番「長調」》を振りはじめるとともに続いた。パレスチナ警創立以来的のオールド・ファンは「トスカニーニが1936年にこの楽団の初のコンサートを振ったときに受けた拍手喝采よりも凄い」と言った。

バーンスタインは、ひんばんにオーケストラといっしょにハミングしたり歌ったりしながら、バトンなしで指揮をとった。次の曲目はバーンスタイン自作の《エレミア交響曲》(交響曲第1番)だった。そのスコアはアテネ、カイロおよびエルサレムのどこかに迷いこんでしまい、新しいスコアが航空便で届いたのはコンサートのわずか3日前だった。しかし、バーンスタインは巧みに70名編成のパレスチナ警を指導して最大の効果をあげた。バーンスタインの若書で、マラー一ぱりのこの交響曲の最終楽章「哀歌」ではメゾ・ソプラノ独唱が旧約聖書「エレミアの哀歌」からの歌詞をヘブライ語で歌う。「ああ、むかしは、民の満ちていたこの都……今は寂しいさまで座し……」と、エレミアは愛するエルサレムを略奪され、汚されて廃墟となったことを嘆く。激しい怒りと絶望感のち、主への祈りによって曲は閉じられる。ヘブライ語を解する多くの聴衆は演奏が終った瞬間いんと静まり返り、場内の各所から啜り泣きがきこ

えていた。我に返った聴衆は万雷の拍手をバーンスタインへ送り、彼は5回も答礼に現われなければならなかった。

さいごにバーンスタインはラヴェルの《ピアノ協奏曲「長調」》の弾き振りで聴衆をわかせた。ピアノistとしても素晴らしい腕をもっているバーンスタインは当時モーツァルト、ラヴェル、ショスタコヴィチのピアノ協奏曲の弾き振りをやってファンを喜ばせた。特にラヴェルの《「長調」協奏曲》(両手のほう)はレニーの18番だった。

翌日、死海で水泳を楽しんだのち、スラックス&スポーツ・コートにくつろいだバーンスタインは記者連に熱を込めて語った。「パレスチナ交響楽団は世界最高のオーケストラの1つになる可能性をもっている。今秋にはアメリカ演奏旅行を決定すべきだと思うが、その前にひとりの指揮者のもてで、がっちり2ヵ月間、ハードなリハーサルをやる必要がある。」

バーンスタインはエルサレムの現代風なエデン・ホテルの窓越しに夢見るように空を見つめながらつぶやいた：「わたしはその仕事をやれたら嬉しいがなあ。」

●砂漠のモーツァルト

1948年5月15日、イスラエル国が誕生した。パレスチナ警も当然イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団(IPO)と改称された。その年の秋、73名の男たちから成る IPO はレナード・バーンスタインのもとで8日間に7回のコンサートをこなした。その直後、バーンスタインは旧約聖書にしばしば現われるベール・シェバの町で史上初のシンフォニー・コンサートをこなすことになった。2台のおんぼろバスに分乗した楽団員たちはイスラエル南部のネゲブ砂漠を越えなければならなかった。バーンスタインも楽員といっしょに堅い木の席にかけ、がたがた揺られながら荒涼とした砂漠地帯を渡っていった。

ベール・シェバでは広い空き地で演奏会場となった。バーンスタインの指揮する IPO はほぼ1,000人の兵士たちのためにモーツァルト、ベートーヴェンとガーシュウィンを演奏した。彼らはベンチをいっばいに、残りの者たちは砂の上にすわりこむか、まわりにあるアラブ人の家の平べったい屋根の上によじ登るかして、むきばるように音楽に聴き入っていた。《アラブ・ディ・イン・ブルー》の弾き振りで、バーンスタインは平ら

な岩の上にバランスをとって置いた椅子にかけてピアノを弾いていたが、椅子がぐらぐら落ちそうになるため中腰で弾かなければならなかった。あわてて第1ヴァイオリン奏者が椅子を支えるのだった。

IPO は5月にイスラエル国成立の式典でイスラエル国歌「ハティクヴァ」の演奏していらい、70回のコンサートを行なってきた。そのうちの23回は戸外で演奏された。じっさい IPO はイスラエル国よりも年長だった。12年前にアルトゥーロ・トスカニーニがさいしょのコンサートを振ったときからパレスチナ警として知られていたのである。IPO の演奏会場だったオーエル・シェム・ホールのキャパシティは1,100席にすぎなかったのので、IPO は音楽ファンの要望にこたえるため同じ曲目のコンサートを9回繰返さなければならなかった。

8週間にわたるイスラエル滞在中、バーンスタインは戦火に荒れたネグバという村に女性と子供たちが戻ってきたと聞いて、彼らのピアノ・リサイタルを与えるため単身車を走らせた。IPO の客演指揮者としての任務を完了したバーンスタインは12月7日に行なわれるニュー・ヨーク・フィル主催の IPO 助成公演にまにあうためテル・アヴィヴを乗った。バーンスタインはイスラエルじゅうを動き回った多忙な8週間の、あらゆる時間をエンジョイした。彼はイスラエルを去る直前にこう言った：「実をいうと、僕は自分が初めて砂漠にモーツァルトをもっていたと思っていた。しかし、モーツァルトはすでに砂漠にいたことをささってわきさき」

●指揮は愛の行為

IPO を初めて指揮していらい今年で38年、バーンスタインにとって IPO はもっとも長くつきあってきたオーケストラである。ここ数年、バーンスタインのレコーディングは主として IPO とのライブ録音によっている。バーンスタインは IPO の精神的父である。バーンスタインは比較的最近「指揮」についてこう語っている：「私が指揮することを愛する理由は私が指揮するピープルを愛しているということです。私はその人たちのために我々が演奏しているピープルを愛しています。それは素晴らしい愛の行為なのです……私が指揮するあらゆるオーケストラが愛の行為です。私は恋人を選ぶようにオーケストラ

を選んだりもしない。どのオーケストラでも恋人になり得るのです：ウィーン、ニューヨークあるいはイスラエル・フィル、ボストン、ロンドン響、あるいは学生のオーケストラだっていいのです。」

(ヘレン・マテオア・ロス著「マエストロ」(ハッチンソン社、1982年))。

とはいえ、バーンスタインにとって IPO が最も長く密接なきずなで結ばれたきたことに疑問の余地はない。



エルサレムの新・旧市街の市あり。旧市街の隅から姿を現した太陽。

広島平和コンサートで8月にレナード・バーンスタインは来日したわけだが、その時の中心曲目は彼の交響曲第3番「カディッシュ」であり、記念レコードとして特別販売されたものはイスラエル・フィルハーモニーとの共演盤であった。

この交響曲第3番「カディッシュ」は20世紀の「祈り」の音楽として最高のもののひとつだと思うが、バーンスタインの自作自演盤(MG1153)はまことに類を見ない迫力のある名盤である。もともと、この交響曲は1963年12月10日にイスラエル・フィルハーモニーによって世界初演されているのだが、1977年の改訂版によるレコードは、作曲者の指揮の下、ソプラノはモンセラ・カバリエ、語り手はマイケル・ウェーガーがつとめ、ウィーン青年合唱団と少年合唱団が共演している。レコードによるデータによると1977年8月にマイン川大学創立500年記念のために同地のラインゴルトバハレで録音されたものだそうだが、バーンスタイン自身にとっても満足のいく仕上がりだったにちがいない。

イスラエル・フィルハーモニーというオーケストラは別にバーンスタインの作品に限らないが、精神的統一感を持ったアンサンブルであって、その燃焼力が高度な次元に達した時、他のいかなるオーケストラも及ばない表現力を持っている。1936年にパレスティナ交響楽団として発足し、1948年にイスラエルの独立と共に今日の名称となったことは、よく知られているが、そのおよそ半世紀の歴史の積み重ねが、このオーケストラの独自の表現力を産み出していったのである。

創立当初は「弦のイスラエル」という評価もあったようだが、今日ではイスラエル生れのメンバーが大半を占め、ロシア系を中心にした移民組は全体の3分の1といわれており、文字通りのイスラエル・フィルハーモニーとしての地位を確立している。日本には1960年にカルロ・マリア・ジュリーニ、1983年にズビン・メータと共に来日しているが、こんどのバーンスタインとの組合せは、おそらくイスラエル・フィルハーモニーの真価を最大限に発揮するものとなるだろう。というのも、この両者の関わりは長く深いといえるからである。

1947年といえば、まだパレスティナ交響楽団の時代であるが、若いバーンスタインはすでに指揮者として登場し、翌年の

シーズンから現在の名称となったオーケストラの支柱として大きな役割を果たしている。1951年のイスラエル・フィルハーモニーの北米公演でも指揮者陣の一翼を担ったと伝えられている。こうした過去の経緯もあって、バーンスタインの自作自演シリーズでも、両者は見事な呼吸を示している。

交響曲第1番「エレミア」(MG1151)には「チェステター詩篇」も組合せられているのだが、クリスタ・ルードヴィヒのソロも含めて、バーンスタインの出世作にこめられた愛情がオーケストラの隅ずみにまで浸透していて、聴くものの胸を打つ名演となっている。交響曲第2番「不安の時代」(MG1152)はイスラエル・フィルハーモニーとも密接な関わりを持つルーカス・フォスのピアノを加え、作曲者の多面性を浮き彫りにしている。そのあとが、すでにふれた交響曲第3番「カディッシュ」であるが、この3枚のレコードはおそろ次の世紀の人びとにも愛聴されるにちがいない。

私はこの3枚だけを細かくふれるつもりであったが、ボリドールの担当者が他にも多くのレコードを選んでくれていて、それをまとめて聴く機会に恵まれた。その中でも傑出しているのが、「セレナーデ」と「ファンシー・ワリー」を組合せたもの(MG1246)で、「セレナーデ」のヴァイオリンはギドン・クレーメルが担当している。この曲が1954年にイスラエル・フィルハーモニーによって初演されている事実を知らなかったが、曲の組合せを含めて、これは推奨されるべき名演である。もう1枚「ディヴェルティメント」を中心としたもの(28MG0449)は、なかなか洒落な味わいを持っているが、ボスロン交響楽団との組合せのほうがより適しているのではないかという感想を持った。

他のオーケストラとの組合せのレコードでバーンスタインの自作自演盤をさらに聴いているが、ここではそのことについては筆をのす必要はないであろう。バーンスタイン=イスラエル・フィルが焦点だからである。以上5枚のレコードで、もし1枚だけということになること、交響曲第3番「カディッシュ」をとるが、2枚となると「カディッシュ」と「セレナーデ」となり、3枚となると逆に交響曲の3部作ということにはしないかと思う。このあたりの選択には個人差が出るものだが、私なりの評価がそういう結果を導き出したと思っていただきたい。



バーンスタインとイスラエル・フィル

ところで、イスラエル・フィルハーモニーはジュリーニ(1960年)とメータ(1983年)によって日本公演を行っており、この四半世紀の間にずいぶん変化するという印象を持っている。そのことについては前回の来日公演の折にも書いているので、ここでは繰返さないが、なんといってもバーンスタインとの組合せが実現した意義は大きい。発表されているプログラムではマーラーの交響曲第9番という大作、それにバーンスタインの作品にプラスしてブラームスの交響曲第1番という組合せ、それぞれイスラエル・フィルハーモニーの実力を発揮するにふさわしいものである。「弦のイスラエル」の時代から50年の歴史を積みあげて、文字通り各セクションの充実したオーケストラであるが、なんといっても精神性の高さが、他の追従を許さぬ域に達している。マーラーやブラームスで場内が静まり、そして高揚する雰囲気は今から想像することが可能なのである。

ところでジュリーニ=イスラエル・フィルの初来日は1960年

12月、そしてバーンスタイン=ニューヨーク・フィルの初来日は翌61年の春であった。ざっと25年前のシーズンということになるが、この期間の日本の音楽界の変貌よりはまことに急展開というに値しよう。

私の個人的な回想を書かせていただくと、イスラエル・フィルハーモニーは日比谷公会堂でどうもまだ暖房設備が整っていないで、厚着をして出かけた記憶があるが、ニューヨーク・フィルハーモニーのほうは東京文化会館のこけら落しで季節もよかったが、新しい時代が来たという実感があった。まさにふたつのオーケストラの来日の間に東京の音楽地図は変わろうとしていたのである。それから25年の歳月が経ち、バーンスタイン=イスラエル・フィルの組合せを迎える。バーンスタインが真の巨匠性を持てば、イスラエル・フィルハーモニーも一流の貴族を身につけてきた。まことによい時期に、最高の組合せを聴けるというのは、ひとつの至福というべきである。

バーンスタインはかつてニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者を務めていた時代にもなお忘れたい印象を残している。どのような作品であれ自分自身の発見と感受性による解釈を示していたからで、それこそ天才を証明するようなものではなかったろうか。もとより、作品の確かな読解力がなければ発見することはないのであり、ただ個性を主張しようとして奇妙な思いつきをやってみせるものが多いし、作品に対する充分な理解力がないところでは共感も挑戦もなく、いたずらに世の中のはやりすたれをあおって目立ちたがるものが多い。今日の指揮者たちは読解力や理解力などを問うのではなくて、たとえばバーンスタインに追従して恰好よく振る舞い、人気を競ってどれだけ売れるか問題だけのようなのだ。それでもオーケストラ音楽が盛んに見えるのは、指揮者の自己表現と個性とにかにかかわらないコピーが氾濫している世で聴衆が真贋を聴き分けられなくなっているせいだろう。

何か新しいものは問題をはらんで現れてくる。もう20年の昔になるが、バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したブラームスの交響曲は、私にすれば異質の音楽と出くわして戸惑うばかりだった。そこには絶叫するブラームスがいいて、しかも見えを切るほどの暗れがましい舞台に上っている。私はブラームスというのは若い時から老成していて陶酔的な表現方法を好むと思っていたから、そんなバーンスタインのダイナミックに斬り込んだ解釈は背を向けたくなるようなものだった。だが、その鋭く迫ってくる起伏と鮮明な表情には初めて知る魅力があった。何がそれほど違った印象を与えたのか。第1交響曲の場合、ブラームスが苦心惨憺した村位法の、従って巧妙とはいえない書法を、バーンスタインはすべて熱烈に肉体的な力の噴き出すところとしている。当時まだ健在であったブルーノ・ワルターが、そこを言いたいことも言いきらず、甘美なオーケストラの響きに呑みこめるような味わいある運びを示していたのと、相違は明らかだ。ただ憧れを知る者のみが共感に浸るといった演奏から見れば、バーンスタインは別な世界に生まれてきたようなものである。

しかし、いままやそんな別の世界がこの世界なのであって、ブラームスの第1交響曲がどれほど精力的に躍動するダイナミズ

ムを表わそうと、誰かが驚くようなことはもうあるまい。バーンスタインはこうした世界にブラームスを引き入れた開拓者の独りだといってよく、客観主義的な解釈の土台を築く大きな力があつた。そのダイナミズムに造形的な安定感を確保した演奏はいまや規準的な意味すらもっている。ブラームスの第3交響曲を聴くとき、私は演奏の開始にどれくらい蓄積した肉体的な力が突き上げてくるか注目するが、そして環を切ったように流れ出てくるものを追おうとするが、今日、いったい蓄積した肉体的な力というべきものはあるのだろうか。バーンスタインを含めた現代の指揮者たちから、そういう音楽の前提となっているような内心混沌たるものを感じたことが私には一度もない。バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したレコードでは、第3交響曲は見通しよく進展していて痛快であり、どの楽章も静かに終るところが優やかな満足の体である。客観的な解釈は無表情な演奏に陥りやすいし、アカデミズムの弊も少なくないが、バーンスタインは作品に特別な親近感を抱いているような表情で訴えてくる。

この指揮者がニューヨーク・フィルハーモニックの常任指揮者を辞めて、ヨーロッパで盛んに活躍するようになってから、いろいろと変わったところはある。かつての輝いた表情には翳りが出てきており、また、ヨーロッパのロマン主義的な伝統に帰依しようとする方向を見せていることも否定できない。しかしそういう個人的な問題以上に、近代音楽を支配していた西ヨーロッパの、その伝統からほとんど逸脱してしまったという事態が起こっており、バーンスタインは、過去のイタリア音楽やドイツ音楽やフランス音楽が美学上変質した後の、いわゆる大衆化したクラシック音楽の世界で、他のどんな指揮者よりも重要な働きをしているといえるのではないだろうか。

バーンスタインがマーラーの復活に関与した功績は大きい。それはなまなましい現代の歴史であって、未曾有の経済的反映を謳歌している時代に炸裂した人間性の矛盾が、バーンスタインのマーラーからはあたかも巨人な壁面を観ているような魅力とすらなって溢れ出てくる。マーラーは「私の時代が来るだろう」と言い遣していたが、半世紀たって現実になったものを、今こうして確かめることができるのだ。いや、マーラーの解釈

者として、ブルーノ・ワルターやクレンペラー、メンゲルベルクやシェルヘン、ホーレンシュタインやバルビローリなどの偉大な足跡を忘れるわけにはゆかない。けれども、バーンスタインは、マーラーをそういう過去の世界と切り離して現代に否も応もなく引っ張り込み、衝撃的な精神と肉体の力が湧いてくる場所としている。

そんなマーラーにあって第4交響曲は私が初めからずっと新鮮な喜びを感じつづけているものだ。激変するテンポを軽妙自在にこなしながら、あらゆるフレーズを克明に彫り込んだ爽快な演奏は、出色のレコードとしていつまでも聴き飽きない。そのバーンスタインがスコアの繁雑きわまりない指示によく同調して、マーラーになりきったかのような感情移入を見せるところで、むしろ現代の息吹きが伝ってくるのは、バーンスタイン自身の発見と感受性が母かっていることだろう。それは、人間が都会の生活で失ってしまった自然を描き出そうとしながら、大自然への憧れや大自然に感じる恐れや大自然と共に生きる喜びを歌い上げている。マーラーが童心に帰ってメルヘンの世界を思い描き、天国的な生活を夢見た作曲のありまとは、やはり異質なものである。当然のことであって、そういうところにこそバーンスタインの解釈が純正な光を放つのだ。夥しいコピーの中へ、この交響曲も埋もれかかっているような状況で、真贋を聞き分けるのは耳しかない。バーンスタインがニューヨーク・フィルハーモニックを指揮した第4交響曲になって終楽章の「天国の生活」を歌うレリ・グリストは黒人ほのあどけない美少女が踊っているようでびっくりさせたものだが、それも郷愁をそる西ヨーロッパとはちがった新しい世界の魅力となっている。しかしながら、そんな世界はおよそ20年たっても色褪せないだけでなく、それ以後二度と見いだすことができないのである。

私はバーンスタインが1970年の大阪でニューヨーク・フィルハーモニックを指揮したマーラーの第9交響曲にもっとも好い思い出がある。マーラーが生き残ることに絶望し、死を憧れたり恐れたり煩悶しながら諦念へと沈んでゆく第9交響曲は、バーンスタインの手でむしろ未知の世界が開けてきたかのような希望すら感じさせたのだ。そこでは作曲家として野心を燃え



レナード・バーンスタイン

立たせていたせいかもしれないが、ちょうど15年を経て、現代のバーンスタインがその交響曲に同様な解釈をとっているのかどうか。マーラーの作曲技法が現代音楽へと新しい道を拓いたというようなことは、現代の作曲家がマーラーに肩を並べているなら初めていえることであって、実際には比較しようもないだろう。バーンスタインによってマーラーの音楽は何なのかと、ここてまた新たに問いかけることができる。

バーンスタインがニューヨーク・フィルを去ってから、とんと彼の姿を見かけなくなったなあと思っていたら、ある年とつぜん TV だったか、白髪と、アゴひげをたくわえた、まるで浦島太郎の里帰りのような彼の容貌に出くわして、びっくりしたことがある。

てっきりバーンスタインは作曲のみに専念して指揮のようなショウマン（バーンスタインにはこの表現は当たっている！）稼業はオサラバしているのかと思っていたら、それがそうでなくて、相変わらずアメリカ仕込みのお尻ふりふり、カエル飛びドタンバタン発汗過剰気味指揮法で、ヨーロッパ楽壇を席捲していたらしい。

話は脱線するけれど、カラヤンがアメリカに生まれていたらどうなっただろうなあ、などとよく考える。

おそらくカラヤン専用の冠 用語になっている「帝王」は存在しなかったと思う。アメリカはブルジョアという⑧階級はあっても、貴族という⑨階級がない。多民族で成っているアメリカ式の、横一列民主主義の前には、いくら第3カラヤンでも手が出ないだろう。

それに一番いけないのはカラヤンはなんたって暗い。人をいつも見下ろそうとする性格は、ヤンキー魂をカチンとさせる。

まあせいぜいしこたまお金を貯め込んで、興業主になるのが勢いばいだろう。

ついでにレニーじゃなかった、バーンスタインが（レニーとか、レーガンのロンとかいった愛称は嫌いである。アメリカの軽薄さを暴露しているようだ）ヨーロッパに生まれていたら、臍舌と多角才能が災いして、これもドサ回りの興業主で終わるだろう。

（お互い生まれるべき国に生まれてよかったというものだ）
 ぼくがはじめてバーンスタインに出会ったのは、今から30年以上も前の、中学生から高校生になる頃だと思ふ。友人の持っていたショスタコヴィチ「交響曲第5番」のレコードだった。

この頃のウパ年少の感性に、力まかせにぶちまけたような強烈なサウンドはショックだった。

多くの記憶にまちがいをければ、たしかレニングラードのライブ録音じゃなかったかと思う。

バーンスタインという名は、もう華々しいというよりケバケバしい指揮者という固定観念を抱いてしまった。

このあと、あの「ウエスト・サイド・ストーリー」という映画が封切られ、その友人にいやがる手を引っ張られて、大阪のOS劇場に観にいった。

スクリーンは標準サイズだったかシネスコだったか忘れたが、チャクリスを主人公とする不良グループが、指をハチンバチンと鳴らしながら、長い脚をスクリーンいっぱいのにのぼすのを見て、びっくりしたのを覚えている。

脚の長いのは、ゲーリー・クーパーや、ヘンリー・フオンダのカウボーイぐらいだと思っていたのに、この若造らの脚の長いのはに驚かされた。

音楽がぼくの嫌いなジャズっぽいものにもかかわらず、非常に感動させられた。ナタリー・ウッドが歌うところの「I feel pretty」は、とてもチャミングでいっぺんにバーンスタインが好きになってしまった。

いまこの稿を書きながら、先日発売された「ウエストサイド」のバーンスタイン指揮の全曲盤を CD でできているのだが、キリ・テ・カナワ、カレーラスの当代随一のオペラ歌手起用には少し疑問を持つ。

この曲はミュージカルであって、オペラ歌手のビブラートのきいた歌唱法は返って、異和感を与える。英語の発音もどことなくアブナカシイ。売れることを考えての歌手起用なら、何をかいわんやだけど。

ぼくはバーンスタイン、ニューヨーク・フィルの演奏会を過去二度みるチャンスがあった。

そのうちの一回は、奥さんが急病とかで来日直前になって、バーンスタインが来れなくなって、別の指揮者が立った。それではくはいくのを止めた。

二回目、たしかマーラーの「巨人」を聴くことができた。拍手がなかなか鳴り止まなくて、（アンコールがあったかどうかよく覚えていないが）、楽員を舞台から退場させて自分ひとり何度も舞台に現われた。そして自分の腕時計を指差しながら「もう遅いからカンペンしてくれ」といったゼスチャアをしてみせたのか印象に残っている。

どういう演奏だったかという、これがよく覚えていない。大変な熱気がホール全体に立ちのぼっていたという空気だけは鮮明に記憶している。

シロウト耳で断定しかねるけれど、バーンスタインは、その場の聴衆とオーケストラを盛り上げる名人ではなかろうか。一種の催眠術効果を作り出す魔術を心得ているのではなかろうか。だから必然的にレコードよりもライブでのバーンスタインの方が、彼の魅力を十分にさせるのではないだろうか。

以前 FM 放送で、ベートーヴェンの弦楽四重奏曲第14番嬰ハ短調を、ウィーン・フィルの弦楽合奏で聴いたことがある。全曲通してスローテンポでいくものだから、退屈極まりない。バーンスタインがベートーヴェンの弦楽四重奏曲の中でも最高位に属するこの難物を、あえて弦楽合奏に編曲した、彼の意図がよく分らなかった。

ところが、これももし現場の演奏会で聴いたとしたら、このスローテンポと合奏は彼流の作法で知らず知らずのうちに、恍惚境へ引き込まれたかも知れない。

さてこれからバーンスタインは、どこへいくのだろうか。ルネッサンス型万能人（ショーンバーグ＝偉大な指揮者たち）は、結局創造の完結をみないで、もっと分り易くいえば、どれもこれも80点90点の、優秀な成績で人生を終えてしまうような、そういう危惧にとらわれる。

「死んでしまえばおしまい」のストコフスキーの二の舞いを踏んでもらいたくない。

カラヤンのように死後の名声を不動のものにしよう、と「自伝」にまでプロデュースするといったアン・フェアなことはして欲しくない。

ぼくはバーンスタイン・ファンにしては、そんなに沢山のレコードを知っているわけではない。彼のマーラーの第2交響曲の「復活」は今でも最高の演奏だと信じているし、中学時代に聴いたショスタコヴィチの第5交響曲も、歴史的な名盤だと思っている。

作曲の方では、「カンディード」序曲、「ミサ曲」、第3交響曲「カディッシュ」ぐらいしか聴いていない。

やはりこれもシロウト耳でいわせてもらえば「ウエスト・サイ

ド・ストーリー」を復しているとは、とうてい思えない。

バーンスタインの資質は、ミュージカルとかオペレッタといったしゃれのめず世界の方が向いているような気がするけれど、専門筋の見方はまた別かも知れない。

「指揮」と「作曲」の二者択一を迫らたらバーンスタインはどちらを選ぶだろうか。

ともあれ、今回のイスラエル・フィルとの来日は、その辺の答えを出してくれるかどうか、今から楽しみにしている。



ついでに拍手も指揮しちゃう

この7月4日、アメリカのインデペンダンス・デイの晩。私はたまたま、サンフランシスコのホテルにいた。ゴールデンゲイトの名物花火も見ず、何気なく部屋のテレビをひねる。公共放送チャンネルからいきなり、耳になじんだ『ウェスト・サイド・ストーリー』プロローグの旋律が飛び込んできたじゃないか。おや？ クローズアップされた指揮者は、果てかなレナード・バーンスタインである。特徴のある白髪。水玉の汗をあふれさせた顔。高く大きな鼻はいよいよよく見える。しわもふえた表情は、いささかフランスのルイ・ド・フェネスに似たな、と私は思わぬ対面に突拍子もない連想を第一印象した。——首都ワシントンでの独立記念日祝賀、野外大演奏会の実況録画なのであった。

巨万のワシントン市民が、Tシャツ姿で芝生の大広場を埋めつくし、後景にはクルマも走り回る首都景観の大気のなか、管弦楽のPAに陶酔している。デリケートなピアノシモノと味わうべくもないだろう巨大ボスだけれど、ふしぎに『ウェスト・サイド・ストーリー』は、微妙な弱音まで含むのにグサグサ受け手へ突き刺さるダイレクトな迫力が、このシチュエーションにこれ以上ふさわしい楽曲はあり得まい、と思えるビツパリの衝撃効果と説得力を生み出してゆく。「アメリカだな、アメリカだ」——私は唖然と、ひとりナショナル交響楽団を指揮しつづけるバーンスタインの白服の踊りを、ブラウン管にみつめ通した。音楽も、風景も、聴衆も、指揮者もでかでかと強烈なアメリカである。

むろん9月にレナード・バーンスタインが来日し、イスラエル・フィルで『ウェスト・サイド・ストーリー』を振ることは知っていた。だからこそ一層、目前に展開しだした演奏に聴き耳も立てたのだ。聴きながら気づいた。これは予断を訂正しなければ、と。

日本公演のレポーターに、バーンスタインは「ハルル」の他、自作としてこの『ウェスト・サイド・ストーリー』(以下WSS)だけ選び出している。おそらくこれが、最も通俗な意味で彼のポピュラリティを代表する一曲にはちがいないが、それ以上にWSSの本質は、これが「アメリカ」をシンボライズできていることにあるのではないかい。いや、それによってこれは同時に、レ

ナード・バーンスタインそのひとを象徴できている……だから彼はこれを85年の日本へ提出するのだ、と。

*

いうまでもなくWSSのオリジナル型は、57年に初演されたバーンスタイン作曲のステージ・ミュージカルである。尤も私たち日本人は最初にこれを、61年封切の映画『ウェスト・サイド物語』のかたちで知覚した。渡航も為替も自由でなかった当時、現場アメリカで舞台を観ることなど想像のほかの奇跡的例外だった。日本人がオリジナルを日本の舞台でパフォーマンスできるようにしたことなど、あとのあとの話である。

私は今も鮮明に、第1回試写か以前の大きな築地・東京劇場でおこなわれた朝を記憶している。ガランとした場内、ソール・バスの鋭角的なタイトルにダブってニューヨークの垂直俯瞰が映り出し、乾いた弱音が指をはじくユニゾンをピッチカミみたいにシンコペイトさせてくる。その瞬間の衝撃から、全編を観おえ、アメリカ・ミュージカル観が一変して呆然と声もなくした三原稿のうえの私まで、切れ目なく思い出す。一緒に見たのはミュージカルに前ったけの美人ラジオ・ディレクターで……といったことはモウどうでもいいが、車のなかでそのひとに、自分は今、ここまでのミュージカル映画を全否定したい気持ちにかられて、と白状したのは現在なおそうだから、忘れることもできない。

勿論、映画『ウェスト・サイド物語』は、振付のジェローム・ロビンズ、監督ロバート・ワイズを含めての映像結晶である。作曲バーンスタインひとりを云々できる作品ではなかった。特にWSSの場合、向こうのクレジットが「この作はジェローム・ロビンズのコンセプションによる。」ことを強調する配慮は、くどいと称していくくらいである。

しかしここで、旧い殻の破壊の向うから切り裂くような鮮烈な発光が届いてき、その光の原点に音楽家レニイが存在したことだけはまされぬい実感で、その音楽あればこそ「トゥナイト」のバルコニー絶唱も、ジムやガレージの名ダンス・シーンも生まれ得たことは明々白白であった。以降四半世紀、結局レナード・バーンスタインは『ウェスト・サイド・ストーリー』においてミュージカルを、シンガー・カーンに止って歌うオペレッタ

から、群像が全体で動き踊る肉体行動のダンス媒体へ変えた……それによってミュージカルは時代という「街」へ解放された、という評価は歴史のなかに定着した。今アメリカ・ミュージカルはよくもわるくも『フォーティセカンド・ストリート』流レヴィューに同質的な洗練をとげている。それでさえWSSという水源がなかったら(つまり戦前・戦中調のポピュラー音楽観だけでは)生まれ得なかったろう流れであることを、痛感する。

そのかんWSSはレコードの世界でも、ミリオンセラーとなった映画サントラ盤を頂点に特筆すべき歴史を作ってきた。「特筆」のひとつは、少なくともこのオリジナル舞台や映画関係の盤に、バーンスタイン自身の指揮による演奏がみつからない現象である。

バーンスタインが自身、WSSを指揮したレコードでは、私の知るかぎり、舞台・映画から離れた2つか印象的である。ひとつは今回の公演と同じ「シンフォニック・ダンス」という肩書のWSS(ニューヨーク・フィル演奏のCBSソニー盤。編曲はレニイと、シド・ラミン、アーウィン・コスタルの共作)。もうひとつは最近出た、キリ・テ・カナワとホセ・カレーラスがうたうオペラチック・スタイルのWSS(編曲は同じ3人)だ。

私はこれを、重要な示唆と受けとめる。作曲家レナード・バーンスタインにとってWSSはたしかに、ステージ・ミュージカルであり映画ミュージカルであるにはちがいないが、指揮者レナード・バーンスタインにとって、この作品はリズムの交響詩であり、同時にオペラに近いカントの対象である、これら2演奏はこの傑作のいわば音楽収束の焦点を問わず語り告白するからである。このミュージカルのアリアのナンバーには、通常のミュージカル歌手では乗り越えにくいソプラノの高音がある、と言われつづけてき、その焦点をレニイはひとつ、テ・カナワの歌唱で実現できた。

が、更に重要な焦点はシンフォニック・ダンスにある、と私は信じる。なぜなら、WSSが本質とするのはなにより青春性であり、青春を前進への動きに凝集してとらえる踊りの行動力こそ、またレニイ自身の本質だからである。作曲家にして指揮者、ピアニストにしてテレビ大衆までの音楽啓蒙家、というレニ



映画『ウェストサイド物語』より

LEONARD BERNSTEIN

バーンスタイン/イスラエル・フィル 来日記念盤



映画「ウェストサイド物語」より

愛息と愛娘に朗唱させ独唱・合唱とオーケストラでうたいあげてゆくカンタータだった。私はこのひとレニの姿勢に感動を受けた。ナショナリズムではない。音楽は人をも国をも未来へ動かす。本気でそれを信じ、それを自分のトータルで実現しつづけることにためらいをもたないオプティミズム——その姿勢の明るく若さに感動があった。

『ウェスト・サイド・ストーリー』にはその音が28年鳴りつづけている。シンフォニック・ダンスには、とくにネアカに。私たちはここに悲劇の感傷を聴くのではない。

いは、単にヴァーサタイルな多芸ミュージシャンではない、音楽のグランド・トータルマン——全体総合者である。しかし彼の総合は決して過去を決算するそれではない。実体は「開拓」であり、そしてWSSが音楽劇として踊り・歌う青春性も、じつは開拓というテーマが底でユダヤ人レニを突き動かすからこそのり出てくることを、聴き落すわけにはゆかないのである。

この作の永続性は元のシェイクスピア悲劇にあるのではない。『ロミオとジュリエット』を枠に、若者の秩序破壊力は永遠であることを実証しつつ、バーバラスなエスニックこそ明日への新聞紙の権利者、その若い向う見ずどうしの摩擦や錯誤、そして愛と知恵による異質エネルギーの止揚にしか、アメリカにも世界にも未来の活性はありはしない。その激しき厳しさを彼は鳴らす。それが同時に「音楽アメリカ」青春のアイコンを創るのだ。

独立記念日のワシントン演奏会、レニがとりあげたもう一つの自作曲は、アメリカ詩人13人が祖国に想いを寄せた詩、(有色エスニック)の痛烈な批判の作もあったが、その一つ一つを

チャイコフスキー《1812年》

◎チャイコフスキー
大序曲《1812年》作品49
幻想序曲《ムムレット》作品67
スラウ行進曲作品31
イタリア奇想曲作品45

イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
指揮 レナード・バーンスタイン

●20MG-0861 (特別価格限定盤) ¥2,000
CD F30G-59028 (特別価格限定盤) ¥3,000 (デジタ録音)
(録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (81年、スラウ行進曲) フォン・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)

◎ストラヴィンスキー
交響曲 ハ調
3楽章の交響曲

CD F35G-50147 ¥3,500
(録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲)
エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)

特別価格
限定盤
●LP ¥2,000
●CD ¥3,000

CD 同時発売

◎ストラヴィンスキー
火の鳥/プルチネルラ

●28MG-0852 ¥2,800
CD F35G-50094 ¥3,500

(録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲)
エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)

DISCOGRAPHY

イスラエル フィルハーモニー	ウィーン・フィルハーモニー	バーンスタイン/イスラエル・フィル	バーンスタイン/ウィーン・フィル
<p>◎メンデルスゾーン 交響曲第3番 イ短調(スコットランド) 序曲(フィンガルの洞窟)</p> <p>●28MG-0007 1128CG-0007 ¥2,800</p> <p>◎ストラヴィンスキー バレエ《春の祭典》</p> <p>●28MG-0605 ¥2,800 CD F35G-50009 ¥3,500</p> <p>◎ストラヴィンスキー バレエ(ペトルーシュカ) バレエの情景</p> <p>●28MG-0729 ¥2,800 CD F35G-50099 ¥3,500</p>	<p>◎メンデルスゾーン 交響曲第3番 イ短調(スコットランド) 序曲(フィンガルの洞窟)</p> <p>●28MG-0007 1128CG-0007 ¥2,800</p> <p>◎ストラヴィンスキー バレエ《春の祭典》</p> <p>●28MG-0605 ¥2,800 CD F35G-50009 ¥3,500</p> <p>◎ストラヴィンスキー バレエ(ペトルーシュカ) バレエの情景</p> <p>●28MG-0729 ¥2,800 CD F35G-50099 ¥3,500</p>	<p>◎チャイコフスキー 大序曲《1812年》作品49 幻想序曲《ムムレット》作品67 スラウ行進曲作品31 イタリア奇想曲作品45</p> <p>イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団 指揮 レナード・バーンスタイン</p> <p>●20MG-0861 (特別価格限定盤) ¥2,000 CD F30G-59028 (特別価格限定盤) ¥3,000 (デジタ録音) (録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (81年、スラウ行進曲) フォン・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p> <p>◎ストラヴィンスキー 交響曲 ハ調 3楽章の交響曲</p> <p>CD F35G-50147 ¥3,500 (録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲) エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p> <p>◎ストラヴィンスキー 火の鳥/プルチネルラ</p> <p>●28MG-0852 ¥2,800 CD F35G-50094 ¥3,500</p> <p>(録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲) エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p>	<p>◎チャイコフスキー 大序曲《1812年》作品49 幻想序曲《ムムレット》作品67 スラウ行進曲作品31 イタリア奇想曲作品45</p> <p>イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団 指揮 レナード・バーンスタイン</p> <p>●20MG-0861 (特別価格限定盤) ¥2,000 CD F30G-59028 (特別価格限定盤) ¥3,000 (デジタ録音) (録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (81年、スラウ行進曲) フォン・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p> <p>◎ストラヴィンスキー 交響曲 ハ調 3楽章の交響曲</p> <p>CD F35G-50147 ¥3,500 (録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲) エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p> <p>◎ストラヴィンスキー 火の鳥/プルチネルラ</p> <p>●28MG-0852 ¥2,800 CD F35G-50094 ¥3,500</p> <p>(録音: 1984年5月、10、12日のライヴ・レコーディング(ヘルムホルツ、イタリア音楽館、1983年) (84年5月15-23日(録音)の交響曲) エル・アダム、ドイツ・グラモフォン・レコード・グループ)</p>

近未来もののSF小説を読んでいたら、バーンスタインの「遺作」というのが出てきた。SFとはいえついつくしてしまった。晩年の巨匠が残した傑作なのだそう。きっとこの作者は、指揮者バーンスタインの光が薄らいだ後になっても、作曲家バーンスタインは不滅だ、と信じているのだろう。ちょうどマーラーのように、やがてそうな日が来るのを確信しているのである。

マーラーの時代、人々は作曲家としての力を、指揮者としての力ほどには高く買わなかった。作曲に精出すマーラーを、もっとオペラの指揮をたかさんすればいいのにと、苦々しく思っていたわけだ。何とまあ耳の悪い人たばかりだったんだらうと、当時の聴衆に腹を立てる人は、でもあまりいいはずである。その気持ちはよくわかるな、というくらいのもの。

バーンスタインは作曲に専念するために指揮活動を一時中断したときなど、誰もが、作曲などいいから、あれを指揮して欲しい、これも指揮して欲しいと、届かぬ声とは知りながら、わめきたてたものだ。たとえば〈トリスタンとイゾルデ〉の演奏が発表されると、〈指揮〉はどうした？ いつ振るんだ？ と言い、ついでにイタリアものだってまだいっぱい残っているのに、などと愚痴を並べる。時代が変り、マーラーが古典になっても、聴く方は大して変わってはいないのである。

後世に残る傑作をものしてもらいたいと願うのではなく、もっとたくさん指揮して欲しいという、情ない聴衆のひとりとして、聞き直してしまうと、これはあたりまえなのだと思う。あのマーラーを聴いて、リヒャルト・シュトラウスももっとやってくれと注文したくなり、〈トリスタン〉を聴いてワグナーを全部振らなくてはならないと思ひ込む、そんな気にならない者が、一体いるだろうか。後世の人には気の毒だけれど、今世いたがしたいのだ。

バーンスタイン自身はこういうやっかいなファンにさんざん手を焼いたと見え、スター指揮者などと呼ばれるのが嫌で、自分はパスポートにそう書かれているように「音楽家」だと見られたいと述べているけれど、なかなかそうはいかないだろう。つらい環境で作曲を続けたマーラーの気持ちを、バーンスタインはきっと痛いほどわかっているに違いない。

同じインタヴューで、バーンスタインは本当にマーラーに親近感を持っていると語っているが、その理由として挙げている中に、なるほどと思うものがある。

「マーラーは作曲家で指揮者、コスモポリタンで田舎者だった。私も作曲家で指揮者、アメリカ人で国際的だ」と言ったあと、こうつけ加えているのである。

「そして音楽が分裂状態なのを理解している。私はマーラーに非常に大きな親近性を感じている。もしかしたらわれわれは、ちょっとだけ精神分裂症なのかも知れない」

分裂状態というのには、いくつもの意味があるだろうが、マーラーの音楽と、そしてバーンスタインの音楽を思い浮かべるだけで、そういえば……と納得してしまう。

通俗的旋律の出現に悩んでフロイトのもとを訪れたマーラーについては、今さら言うまでもない。ではバーンスタインの曲がどうなのかというと、負けないくらい分裂的ではないだろうか。

たとえばウエストサイド物語。ジャズを取り入れた、ゲーシュイン直系みたいなところがある。トニーの歌う「マリア」やトニーとマリアの「トゥナイト」などは、確かに旋律的にはすぐれているが、一時代昔のミュージカルに出てきてもおかしくないような歌だ。決闘に向かう場面の「5重唱」ときたら、実に緻密な声の扱いで、ミュージカルでこんなことをやってもいいのかというくらい、本格的である。おまけに一見何気ないフレーズでも、手のこんだ、生半可な歌手には歌にくいしかけがけである。やたらに転調はするし、もしかしたら「難解」なのかと思ってしまうところもあるのだ。

分裂的だったら必ずひどい結果になるとは限らないのは、すでにマーラーが証明済み。とはいえ、これまで聴けた、映画のサントラ盤などの「ウエストサイド」では、分裂的なのは、弱点とまではいかにせよ、目につかないわけではなかった。ところが最近評判のバーンスタイン自身による「ウエストサイド」となると、一見相容れない、混乱に近いような「分裂状態」がひとつのつづみの中で溶解して、その活力と熱気が、積極的な音楽の魅力を作り上げている。

指揮者バーンスタインは、いろいろな曲でその驚くべき力を

発揮するのだけれど、自作となると、その能力とはまた違った面が現れてくるらしい。つまり、音楽の分裂は作曲家の分裂で、それが分裂のまま不思議な調和を保っていられるのは、一自身それを引き受けて生きている作曲家自身の演奏にしくは無いということなのだろう。

作曲家自身の演奏というのは、曲そのものの出来具合を示すのが主で、別のすぐれた解釈者よりもつまらなくなってしまう場合が多いのだが、少くともこの曲でのバーンスタインの演奏は違っている。

それなら、「親近性」のあるマーラーの場合も、きっと同じように「すばらしい分裂」を示した自作自演を行っていたに違いない。残念なことにマーラーの自作自演はまったく記録に残っていないが、たとえ断片なりと聴いてみたい。あれだけこまかい指示をスコアに書き込まずにはいらなかったマーラーのことだから、いかに有能でも他人には難しいのを知っていたはずなのである。

もっとも、当時の人々には、マーラーの自作自演よりも、マーラーが指揮するベートーヴェンやワーグナーの方がずっと好まれていたわけで、それもよく理解できる。そして、自作のちょっとおかしな交響曲などよりも立派な名曲を指揮してもらう方がいいな、と思いつつマーラーの交響曲の演奏を聴いて、後世になってこの演奏を断片でもいにか聴いてみたいと願う者も出てくるだろうと、かすかな予感を抱いた人がいたかも知れない。

指揮者としてひっぱりだこのバーンスタインも、自作となると大変少ない回数しか指揮していない。そして、それを惜しむる向きはあまり多くない。でも、マーラーの自作自演を聴いた、当時の聴衆のことを考えてみると、後世には……などと無駄な思いをするよりも、今この自作自演を聴く喜びを味わってしまおうという気になってくる。

マーラーの「分裂」は同時代人にとって理解し難いところがあった。けれども、幸いにも、(というべきか不幸にもというべきか) バーンスタインの「分裂」は、われわれの理解を絶しているわけではない。すでにマーラーの音楽は強い支持を得ている。たまたまがたったからというだけでなく、おそらく時代その

ものが、マーラーの分裂と共鳴しているのである。マーラーが早くも悩み、バーンスタインがはっきりと意識している分裂の病は、時代を深く侵蝕しているのだろう。バーンスタインの自作自演に、共感してしまう不幸と、共感できる幸福が、すぐにも手に入れられるのである。



1969年厳しいオーディションを経てI.P.O (イスラエル・フィルハーモニック・オーケストラ)に入団し、以後約8年間在籍した。年間定期演奏会164回、その他特別企画の演奏会、イスラエルフェスティバル参加、外国演奏旅行等々を数に加えれば200公演を越える。定期演奏シリーズが変わる前4日間はリハーサルと夜の演奏会(開演は夜8時30分)とで指揮者・ソリストが常に重なる。朝の練習ではズービン・メータとアイザック・スターン。同じ日の夜の演奏会はレオナード・バーンシュタインとアイザック・パールマン、といった具合である。このオーケストラは、普通一般的に考えられるヨーロッパ的とかアメリカ的といった概念からは全く異質な存在である。というのは、イスラエル建国以前から世界各地から帰って来たユダヤ音楽家の集まりで、主にロシア系、ドイツ系、アメリカ系、フランス系が主体である。40年程前にヨーロッパから帰ったユダヤ音楽家が集めてトスカニーニとヴァイオリン奏者、ワーベルマンを中心にして出来たこのオーケストラの中には、世界各地から一流オーケストラのトップメンバーが集った。私がI.P.O.を去る前年(76年)まで30数年間メンバーでいたホルン奏者(ソロモン・ホルスト)は、フルトヴェングラー時代のベルリン・フィルの第一奏者であった。(その間トスカニーニのN.B.C.オーケストラ首席の仕事をしている)この様な経歴を持った者は他にも沢山いる。しかし近年、イスラエルで生れ育ち(サブレ

という)、音楽教育をイスラエル国内で受けて入団する若い奏者が増え、当然オーケストラの音も変わっていくが、良く知られているようにユダヤ人の弦楽器奏者の演奏技術は極めて高く、オーケストラの主役をなすヴァイオリン・セクションの響きは、特記に値する。時々乱暴にも聞こえる底深い弦楽器の鳴りは、世界に唯一無二のものであって、他の何処のオーケストラにも無いと思う。一緒に演奏していて背筋に戦りつかさず。さて、今夜の指揮者L.バーンシュタインはレニーの愛称で親しまれ、何かしらいつも特別であった。何か特別かと例記する事は難しいが、あえて言うならば奇跡が起っていたかと思えるのである。L.バーンシュタインの音楽がすべてそうさせたか云々は簡単であるが、私にはI.P.O.とバーンシュタインの何とも云われぬ人間、人種的なふれ合いが起す現象の様気がする。彼の指揮は通常の4分の4とか、8分の6といった指揮法からは程遠い。そうした見方から見ると彼の指揮を見るのは困難極まりない。彼の体が動く、奏者が演奏するというだけ……、両者の間に通う互いの心の歌が一緒になって……、これ以上書くことは私には難しい。私がイスラエルを去る時、丁度I.P.O.と彼のフェスティバルが始まろうとする4月の下旬であった。私の肩を抱き「ヨシ(私の愛称)お前もか……」と言いかざしそうに言った事が忘れられない。

(チェリスト・東京アーティスト合奏団代表)



壁の壁



死海のほとりの保養所風景

イスラエルフィルを世界の親善大使とすることは創設者プロニスラフ・ワーベルマンの夢であった。

そして結成第1回の演奏会から2週間を経ずしてオーケストラは初めての国外公演の地エジプトへと出発した。トスカニーニがタクトを振った。

ワーベルマンはイスラエル・フィルを、中東全土に音楽を届ける機動力のある団体にしようという構想を持っていた。エジプトやレバノンへは今回も出掛けた。戦時中、オーケストラはこの二国とパレスチナに駐屯する同盟国の兵士たちのために168回にもなる演奏会を開催した。しかし1945/46年のシーズン以後は、地域的な政治情勢の緊張のため、近隣諸国での公演活動は中止せざるを得なくなっている。しかしオーケストラは再び文化交流の可能となる日が来るという望みを捨てず、その音楽がエジプトやイスラエルの隣人である国々で歓迎される日は遠くないことを願っている。

設立当初から活発に国外での活動を開始したこのオーケストラを“イスラエルの最も優れた外交特使”と称したのはアメリカ大使モローネ・B・ディヴィスであった。

1951年、オーケストラは大規模な国外公演旅行の第1回として、アメリカとカナダへ出掛けた。クーセヴィツキーとバーンスタインが指揮者であった。ヨーロッパ公演の第1回は、1955年、クレツキとバレーを指揮者に置いて実施された。1960年には初めての世界一周公演旅行を敢行し、フランス、アメリカ、カナダ、メキシコ、日本、インドで演奏会を行った。この時はカルロ・マリヤ・ジュリーニを首席指揮者、ヨーゼフ・クリップスを客員指揮者、ゲイリー・ペルティエニを副指揮者に迎えての公演旅行であった。1966年にはメータ、ドラティ、エリアフ・インバルと共にオーストラリア、ニュージーランド、香港で公演した。

六日戦争の後、オーケストラはイスラエル非常基金のために急ぎよ北米1ヶ月の公演旅行を敢行し、16都市で21回の公演を行った。

1968年のイスラエル建国20周年記念行事の一環としてIPOは英国への公演旅行を行い、帰路ウィーン音楽祭に参加して3回の演奏会を行った。

1969年、イタリアのフローレンスの五月音楽祭への参加依頼を受けたのを機に、同年6月イタリア各地にも足をのびた。

1971年にはヨーロッパのほとんどの主要音楽祭に参加。ザルツブルグ、ルツェルン、エディンバラ、ベルリン、フランクフルト、ストレーサ、ヴェニス、ロンドン。指揮者はメータ、クリップス、ケルテス。またソリストとしてはアルトゥール・ルービンシュタイン、ダニエル・バレンボイム、ユードティ・メニューイン、ピンカス・ズッカーマンを招いた。

ズービン・メータの指揮のともに1972年、南米公演に出たイスラエル・フィルはその総合的な力を発揮した。それに続いて、メキシコ、アメリカ、カナダ、イギリスと、かつて成功を取った土地を再び訪れた。アルトゥール・ルービンシュタイン、グレゴール・ピアティゴルスキー、イツァーク・パールマン、ダニエル・バレンボイムのほかオーケストラのメンバーもソリストとして共演。演目にはイスラエル人作曲家のものが2曲組み入れられた。

ヨム・キプー戦争(贖罪日戦争)の後、IPOは英国とオランダへ親善公演に出掛け、特にオランダ人の支援に感謝の意を表した。

1974年は南北両半球を訪れる年となった。まず8月に南アメリカ・シオニズム同盟の主催ではじめての南アフリカ公演を敢行。同年さらにユダヤ支援連合会の後援により、新年キャンペーンの主要行事としてアメリカでの演奏を行った。

1975年にも2回の国外公演を行った。まずアルトゥール・ルービンシュタインをソリストとするロンドンでのガラ・コンサートを含む英国ツアーであり、ロイヤル・フィルハーモニック・ソサエティの後援を得て実施された。ロンドンのあと、オーケストラはヨーロッパで2回の演奏会を行った。ひとつはピンカス・ズッカーマンをソリストに迎えてのジュネーブでの演奏会、他にはアルトゥール・ルービンシュタインをソリストとするパリでのもので、これはフランスのワイツマン・インスティテュートの後援によるガラ・コンサートであった。

同年の夏、ヨーロッパ各地の主要フェスティバルからの招きに応じて再びオーケストラはヨーロッパを訪れた。ザルツブルグ、ルツェルン、エディンバラ、ベルリンと回る間に途中コペ

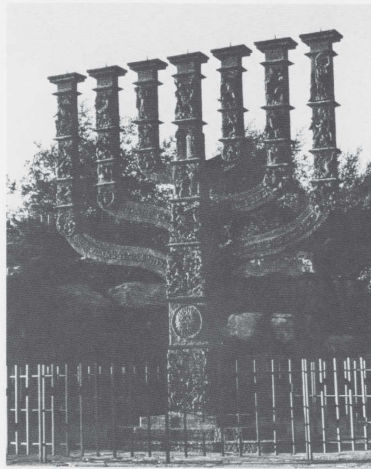
ンハーゲンとスウェーデンでも演奏会を行った。またドイツの6都市、スカラ座での3回を含むイタリア5回の公演を行い、ウィーン・ムジーク・フェラインで演奏旅行を始めた。オーケストラ自体にとっても、音楽監督ズービン・メータにとっても、また客演のソリストにとっても大きな成功を収めることのできたツアーであった。ソリストとして参加したのは、アイザック・スターン、イツァーク・パールマン、ジャネット・ペーカー、フィッシャー=ディスカウ、ダニエル・ベニヤミーニ、ユリ・ピアンカ、アルフレッド・ブレンデルであった。

1976年夏、アメリカ建国200年祭に、IPOはイスラエル国家の代表として派遣され、カナダでの3回を含む23都市28回という、アメリカ横断公演旅行となった。指揮は2回を除きすべてズービン・メータであったが、ワシントンとニューヨークでの最後の2回は、レナード・バーンスタインがタクトをとった。このほか、アイザック・スターン、クラウディオ・アラウ、ピнкаス・ズッカーマン、イツァーク・パールマン、ハイム・タウプ、ユリ・ピアンカ、イエフ・ム・ブロンフマンらが客演した。

親善大使の任を負ったオーケストラは、各都市で、また南部や中西部の大学でのホールで満員の聴衆を迎えられた。ニューヨークでの最終演奏会はアメリカ・イスラエル文化財団の年次の基金募集活動の一環として同財団が後援した。またシカゴでもニューヨークの場合と同様に同財団はその会員と会友の前にその常日頃の支援の裏を証明し、楽しんでもらう機会を提供したのである。

1977年の夏、オーケストラは再びヨーロッパに出掛けた。ズービン・メータ指揮によるフランス・オランジュのフェスティバルを皮切りに、レナード・バーンスタインでオーストリアとドイツ、メータによるスガジンガヴィア巡演、そして最後はフランダース・フェスティバルと、バリのバリ・ド・コングレでのコンサートでメータの指揮により行い、6週間のツアーを締めくくった。

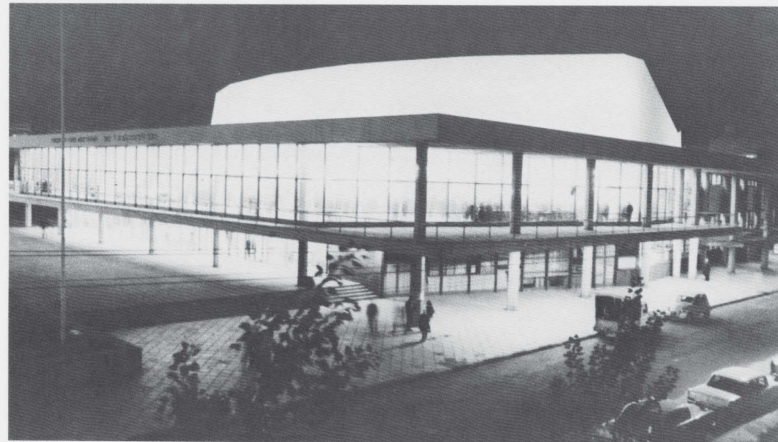
1978年は再び遠い国へと出掛ける年となった。オーストラリア放送協会及びオーストラリアのIPO友好協会の主催で実施されたオーストラリア公演は、アレド・フェスティバルも



イスラエル国営のシンボル

含めて大きな成功を収めることができた。6月、ズービン・メータの率いるIPOはイスラエル独立30周年記念コンサートで演奏した。同コンサートは、ソリストにアルトゥーロ・ベネデッティ・ミケランジェリを迎えてドイツのボンで開催されたものである。

しかしオーケストラによる30周年記念の主要行事は、8月の南北アメリカ大陸の大旅行である。アメリカ（ワシントンDC及びニューヨーク）の演奏会はズービン・メータとレナード・バーンスタインが指揮をし、メキシコとブラジル（リオ・デ・ジャネイロとサン・パウロ）ではエドワード・マータ、エリアフ・インバリ、シャルル・デュトワが指揮台に立った。参加したソリストは、ピアニストのアリシア・デ・ラローチャとイエフ・ム・ブロンフマン、ヴァイオリンのイダ・ヘンデルとシルヴィア・マルコヴィッチ、チェロのミシャ・マイスキーであった。



イスラエル・フィルの本拠地、FR記念講堂

1979年、ヨーロッパの著名音楽祭に参加した。まずザルツブルグに行き、バーンスタインの指揮により、プロコフィエフとメンデルスゾーンの親しみ深い曲によってコンサート旅行の幕を開けた。同じ曲目をミュンヘンでも演奏し、ここではレコーディングも行われた。続いてズービン・メータが率いるIPOはヨーロッパの主要都市を訪れたが、その中にはアップランドとフィンランドの首都や、ロイヤル・アルベルト・ホールでのプロムナード・コンサート、ミラノのスカラ座での演奏会も含まれていた。合計18都市での27回の演奏会はそれまでを上回る成功で、聴衆も熱狂的に満いた。参加ソリストは、アイザック・スターン、ダニエル・バレンボイム、ディートリッヒ・フィッシャー=ディスカウ、アンネ・ゾフィー・ムター、シルヴィア・マルコヴィチという華やかな顔ぶれであった。IPOはヨム・キブール前夜にテル・アヴィブに戻り、2日間だけの休息ののち、1980年の定期コンサート・シリーズを開始したのである。

1980年夏、ズービン・メータと共に南米公演に出たIPOは、ラヴェル、ベートーベン、ウェーバー、ヴィヴァルディ、ヒナスデラ、リスト、チャイコフスキーなどの作品を演奏した。イエフ・ム・ブロンフマンとイラン・ロゴフがソリストとして加わった。訪問した都市は、モンテヴィデオ、ブエノスアイレス、サンパウロ、リオ・デ・ジャネイロなど。サンパウロの大学構内で行われたコンサートは特に興味深いものであった。

1982年5/6月。メキシコ、アメリカ、カナダ公演。この公演旅行中唯一のヨーロッパの都市であるボンからスタートした。指揮はバーンスタイン。続いてメキシコで6回、アメリカ（ヒューストンとダラス）で2回。フルートのランサム・ウィルソンとIPOのヴァイオリニスト、メナヘム・ブラアーがソリストを務めた。その後アメリカ、カナダの各地でのコンサートはズービン・メータの指揮によるもので、ミルウォーキー、シカゴ、コロムバス、メンフィス、ワシントン、ニューヨーク、フィラ



イスラエル・フィルとニューヨーク・フィルとのジョイント・ガラ・コンサート (IPO側は白、ニューヨーク側は黒)

デルフィ、トロント、オタワ、モントリオールで公演という大規模なものであった。ユリ・ピアンカ、シュロモ・ミンツ、イツァーク・パールマン、及びオペラ歌手レオンティン・ブライスのソリストとしての参加を得た。ニューヨーク市アヴェル・フィッシャー・ホールでのズービン・メータ指揮によるニューヨーク・フィルハーモニックとのジョイント・コンサートはこの公演旅行のハイライトであった。

1982年10月、IPOはこの年2度目の国外公演に出掛けた。こ

の時は短期のスペイン公演で、指揮はロベス・コボス、ソリストをIPO団員のダニエル・ベニャミーニ（首席ビオラ）とハイム・タウブ（コンサートマスター）が務めた。2回のコンサートの新聞評は絶賛で、聴衆の暖かい反応も報道された。

1983年3月の日本公演は1960年以来的のものであった。東京、名古屋、京都、甲府、福岡、大阪の6都市で9回のコンサートを行った。ズービン・メータの指揮による演奏会は、聴衆の反応からも批評の面でも大きな成功であった。批評の一例を挙げ

る。(サンケイ新聞より)“IPOは23年前のときと比べて成熟し成長した。他のオーケストラには見られない成熟ぶりである。比類のない質の良さをもっている。完成度の高い豊かな感受性を感じさせるオーケストラだ。”

同1983年の夏、IPOはヴェネズエラのカラカスと、ヨーロッパの音楽祭に出演。ヴェネズエラ政府の招きでカラカスを訪れたオーケストラは、国民的英雄ボリヴァーの生涯200年記念として4回のコンサートを行った。ヴェネズエラ公演を終了したIPOはその足でヨーロッパに飛び、8月24日のザルツブルグを皮切りに、ミュンヘン、ルクセンブルグ、ルツェルン、ストレーザ、フランクフルト、ボン、ベルリン、ブリュッセル、ロンドン、パリ、フローレンスなど、著名音楽祭及び主要都市で公演し、9月18日と19日のヴェニスでの2回のコンサートで締めくくった。カラカスとヨーロッパのすべてのコンサートは、IPOの音楽監督マエストロ・ズービン・メータの指揮によるものであった。

マーラーの交響曲3番の演奏には、ほとんどの主要都市では、国際的名声のあるオペラ・スターのソプラノ、フローレンス・キヴァールが共演した。ルクセンブルグ、ブリュッセル、及びヴェニスでは、IPOの首席コンサートマスター、ハイム・タウブがソリストを務めた。ベルリンでは、ウラジミール・アシュケナージがIPOと共に、ロンドンではダニエル・バレンボイム、パリではシュロモ・ミンツが出演した。

1984年5月、五月音楽祭の招きでフローレンスを訪れ、2回のコンサートを行った。レナード・バーンスタイン指揮による2回のコンサートは、マーラーの「子どもの不思議な角笛」で、ソプラノにルチア・ボップ、バリトンにウォルトン・グリーンルースの参加を得た。

1984年7月、IPOは、ズービン・メータの指揮のもと、オーストラリア及びカリフォルニアへ旅立った。オーストラリアは、1966年と1978年に次ぐ3回目の訪問である。この時もオーストラリア放送との契約によるものであった。またオーストラリア会長イスラエル・ブラункフィールド氏の指導により献身的な支援と多額の寄付を寄せてくれたオーストラリアIPO友好協会の尽力も成功の一因であった。



イスラエル・レバノン国境でのコンサート

ベースで幕を開け、シドニー、キャンベラ、メルボルン、ブリスベーンと続けられた12回のコンサートは、5種類のプログラムを順に演奏するものであった。ソリストにはヴァイオリンのシュロモ・ミンツ、IPOの首席ヴィオリストで経営理事会長でもあるダニエル・ベニャミーニ、及び才能豊かなオーストラリアのアルト、ローリス・エルムスを得た。

オーストラリア総督ニニアン・ステイブン卿がパトロンを中心的存在であった。オーストラリア首相R.J.h.ホーク閣下、イスラエル大使Y.ベン・ヤアコフ閣下及びツルヘルマン・コーウエン閣下もパトロンとして名を連ねた。

オーストラリア巡演を終えたIPOはシドニーからサンフランシスコへ足を伸ばし、2回のコンサートを行った。またロスアンジェルス「ハリウッド・ボール」では3回の野外コンサートを行ったが、そのうちの第1回のコンサートは、1984年オリンピックの開会と時を同じくしてのものであった。この時のプログラム前半は、1972年のミュンヘン・オリンピックの際にアラブのテロリストによって命を奪われた11名のイスラエルのスポーツマンに捧げられ、イスラエル人作曲家ポール・ベニ・ハイムによる「賛歌」が演奏された。ロサンゼルス市長を含む各界の名士や映画・演劇界のスターが聴衆の中に見られた。司会はグレゴリー・ベックが務めた。イツァーク・パールマンがペーター・ベンのヴァイオリン・コンチェルトを演奏。

その他、サンフランシスコではシュロモ・ミンツ、ハリウッド・ボールのマーラー第3交響曲にはフローレンス・キヴァールがソリストとして出演した。

半径拡大 DCカード

新しいことを始める
自分の世界を広げる
そんなときDCカードは
あなたのたのしい味方
今日のコンサート
とてもよかった



- ショッピングにレジャーに、世界の国々で共通にご利用になれる国際カードです。
- みなさまの暮らしをサポートする各種サービスがますます充実、頼りになる1枚です。

ダイヤモンドクレジット株式会社

本社 〒150 東京都渋谷区道玄坂1の3の2 ☎03(464)6611

DC CARD



開業50周年記念

街に、瞳に、秋のソナタ。

小田急

ホテル センチュリー
HYATT

〒160 東京都新宿区西新宿2-7-2 TEL.(03)349-0111
大阪営業所 〒530 大阪市北区西大津2-10-2 幸田ビル703号 TEL.(06)365-7211
名古屋営業所 〒460 名古屋市中区栄1-13-2 愛蔵館2C・5階 TEL.(052)263-0462

CENTURY
THE LUXURY HOTEL

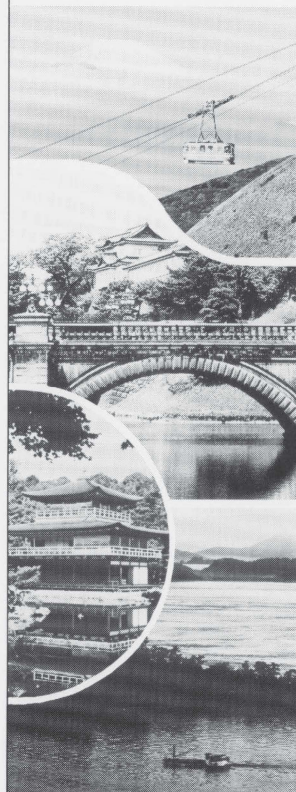
タクトがおどる

心にしみるオーケストラの響き

白いページに余韻がのこる……。

プログラム、ポスター、チラシなどの企画・制作のご用命は
株式会社 東 神 堂 〒101東京都千代田区神田司町2-14 TEL.03 (252) 7611代

ふれあい。日本流。海外からのお客さまに 充実した日本の旅850コース。



経済大国、それとも神秘の国。
日本に対する評価はそれぞれですが、
心のこもったおもてなしで
日本の本当の姿を見ていただくのはいかがですか。
日本交通公社のサンライズツアーは、
20年以上の歴史を持ち
300万人以上のかたにご利用いただきました。
ご希望に合わせて、
日本の充実した旅を満喫していただけます。
外国からの大切なお客さまは、
サンライズツアーにおまかせください。

Sunrise Tours

サンライズツアーは、海外からの大切なお客さまのために、
日本全国の主な観光地をすべて網羅したパッケージ旅行です。
その種類は65本、ご希望に応じて実に850通りの組み合わせができ、
ホテル・列車・バス・ガイドなどをすべて含んだ
バラエティー豊かなコースです。
●ご予約は簡単。電話一本で即座に完了。
●パッケージ旅行なので、おひとりでもご利用になれ、しかもおトク。
●ツアーのはほとんどが毎日運行されており、ご予約は前夜まで可能。
突然のお客さまにも安心です。

サンライズセンター
東京 ☎03(276) 7777
毎日9:15-23:00(年中無休)
京都 ☎075(361) 7241

★最寄りの各支店・主要旅行代理店でも受付けております。

池 日本交通公社 外人旅行事業部
〒103 東京都中央区日本橋1-13-1 日鉄日本橋ビル



予告 クライバー+バイエルン国立管



来春5月待望の来日決定、

当代の人気指揮者カルロス・クライバーが、バイエルン国立歌劇場のオーケストラを率いて来日。コンサートへの登場はわが国ではこれが初めて。1986年度音楽界随一のコンサート。

★詳しい資料が出来次第お届けします。
ご希望の方はNBSへ。

モーリス・ベジャール 20世紀バレエ団



バレエ、演劇、音楽、詩の世界を超えた
衝撃のスペクタクル、

ティオニソス コンクール わが事都ウイン
10/17(土)6:30 東京 10/27(日)1:30 大阪 10/22(土)6:30 福岡
10/18(土)6:30 東京 10/27(日)6:30 大阪 10/23(土)6:30 神戸
10/19(土)6:30 東京 10/29(土)6:30 横浜 10/24(土)6:30 名古屋
10/20(日)1:30 東京 11/3(土)6:30 東京 10/30(土)6:30 東京
10/26(土)6:30 大阪 11/4(日)1:30 東京 10/31(土)6:30 東京
11/4(日)6:30 東京 11/1(土)6:30 東京
11/2(土)6:30 東京

東京公演入場料：S＝¥14000 A＝¥12000 B＝¥10000
C＝¥8000 D＝¥6000 E＝¥4000(聴衆保障料＝入場料を引く)

チャイコフスキー記念「くるみ割り人形」 東京バレエ団

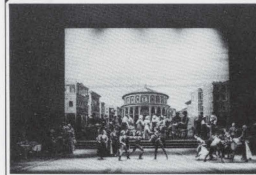


ボリショイ・バレエの貴公子
ウラジミール・デレヴィヤンコ
特別出演決定、

12/1 (日) 1:30p.m. 東京文化会館
12/2 (月) 6:30p.m. 東京文化会館
12/3 (火) 6:30p.m. 東京文化会館

入場料：S＝¥8000 A＝¥7000 B＝¥6000
C＝¥5000 D＝¥4000 E＝¥3000

予告 パリ・オペラ座バレエ団



豪華キャストで来春5月来日決定、

●予定される演出
「ロメオとジュリエット」「ベジャールのタブー」
●予定される出演者
シルヴィ・ギエム、フローランス・クレール
モニク・ディエール、エリザベット・プラチール
クロード・ボヴェルヒアン、ハトリック・デュボン
シャルル・ジュード、ジャン・イヴ・ロルモールほか
若きスターたち。

詳しい資料が出来次第お届けします。ご希望の方はNBSへ。

NBS 日本舞台芸術振興会 〒152 東京都目黒区八雲5-1-20/Tel. (03)723-2356(代)

NBS

財団法人 日本舞台芸術振興会
JAPAN PERFORMING ARTS FOUNDATION

財団法人 日本舞台芸術振興会は、音楽・舞踊を主とする舞台芸術の普及向上を図るとともに、舞台芸術の国際交流を推進し、もってわが国の芸術文化の振興と発展に寄与することを目的として設立されました。

各種団体、公共機関と提携協力して、これまで民間個人の力では手が届かなかった芸術家育成事業の充実ならびに芸術団体への援助、および国内・国外の公演活動の活発化、国際交流の促進などにつとめ、微力ながら所期の目的を達成するため次のような事業を行ってまいりたく、広く皆様方の御支援、御協力をいただけますようお願い申し上げます。

1. 舞台芸術に関する公演の開催
2. 舞台芸術に関する芸術家及び技術者の育成
3. 舞台芸術に関する国際交流
4. 舞台芸術に関する資料の収集及び調査研究
5. 機関紙及び舞台芸術に関する出版物の刊行
6. その他目的を達成するために必要な事業

理事長 坊 秀男

専務理事 佐々木忠次

常務理事 長瀬 寛照 吉田 貴壽

理事 姉小路公経 澄田 智 竹内 道雄 橋本 明治 福屋 信夫

森 治樹 吉岡 二郎 吉田富士雄 吉久 勝美

監事 大倉 真隆 川北 博

顧問 安達 健二 横田喜三郎

財団法人 日本舞台芸術振興会／〒152 東京都目黒区八雲5-1-20/Tel. (03)723-2356(代)

「イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団」 来日演奏会プログラム

発行：日本舞台芸術振興会
編集：ジャパン・アート・スタッフ

写真提供：イスラエル・フィルハーモニー管弦楽団
駐日イスラエル大使館
ホリドール株式会社
S. Bayet H. Grossman
財団法人 川喜多記念映画文化財団

翻訳：小出照子／酒井洋子
印刷：東神堂

© Printed in Japan 1985